

垂井町遺跡詳細分布調査報告書（2）

2020. 3

垂井町教育委員会

序

垂井町は、岐阜県の南西部に位置し、山と川の豊かな自然に恵まれ、縄文時代から近世までの多くの遺跡が存在します。

本町では、これらの遺跡を保護・活用するため、平成 24 年度から平成 28 年度に町域の一部で行った遺跡分布調査に引き続き、平成 29 年度から、残る全町域を対象とした調査を行いました。本書は、その報告書となります。

人口減少、少子高齢化が本格的に進む状況で、遺跡の保護のみに注力する時代は終わりを迎えつつあります。これからの埋蔵文化財行政は、地域の宝である遺跡（埋蔵文化財）を如何に大切にし、地域の方々と協働して如何に活用していくかを常に考えながら行っていかなければならないと強く感じています。

最後になりましたが、本調査にあたり、御協力をいただきました地元の方々を始め、関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

垂井町教育委員会 教育長 和田 満

例言

1. 本報告書は、岐阜県不破郡垂井町の垂井地区、府中地区、表佐地区、岩手地区、東地区のそれぞれ一部を対象とした埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査報告書である。
2. 調査は、平成 29 年度から令和元年度までの 3 カ年、文化庁国庫補助金を受け、垂井町教育委員会が実施した。
3. 本報告書の作成、執筆は亀田剛広が担当した。
4. 町の概説及び分布調査の方法等については、垂井町詳細分布調査報告書（1）（以下、「報告書（1）」）と同様であるため、本書においては省略した。
5. 分布調査および本報告書に係わる図版、写真、遺物等の調査資料は垂井町教育委員会タリイピアセンターが保管している。

凡例

1. 遺物実測図は、土器・陶磁器 1 / 3、石製品 1 / 2 として統一した。
2. 遺物の時期比定については、主に下記の編年観に拠っている。

渡邊博人『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会、1984 年
「美濃後期古墳出土須恵器の様相－蓋坏の型式設定としての編年試案－」『美濃の考古学』創刊号、1996 年
尾野善裕「猿投窯系須恵器編年の再構成」『須恵器の出現から消滅』東海土器研究会、2000 年
藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第 3 号、三重県埋蔵文化財センター、1994 年
『中世瀬戸窯の研究』高志書院、2008 年
中野晴久「常滑・渥美」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』2005 年
3. 遺跡の概要等について、特に言及しない限り、下記を参照している。

『不破郡史』上、不破郡教育会、1926 年
『垂井町史』史料編、垂井町史編纂委員会、1968 年
『垂井町史』通史編、垂井町史編纂委員会、1969 年
『岐阜県史』通史編 原始、岐阜県、1972 年
大岡明臣『埋蔵文化財調査票 北部編』1974 年
勝野勉『埋蔵文化財調査票 南部編』1974 年
『新修垂井町史』史料編、垂井町、1994 年
『新修垂井町史』通史編、垂井町、1996 年

目次

序

例言	1
----	---

凡例	1
----	---

目次	2
----	---

第1章 調査体制と成果

(1) 調査体制	5
----------	---

(2) 遺跡の概要

1. 菩提山城跡	6
2. 田町古墳	7
3. 御茶屋古墳	7
4. 竹中氏陣屋跡	7
5. 伊富岐神社経塚群	8
6. 長尾遺跡	9
7. 長尾古墳群	9
8. 長畑古墳群	10
9. 乙井古墳	10
10. 東大井古墳	11
11. 大石古窯跡	11
12. 大滝西山古墳	12
13. 大滝古墳	12
14. 野瀬古墳群	12
15. 大石東野古墳群	13
16. 大滝東山古墳群	13
17. 戸張古墳	13
18. 南大塚古墳	14
19. 岡田堂古墳	15
20. 親ヶ谷古墳	15
21. 清塚古墳群	16
22. 綾戸古墳	17
23. 喪山古墳	17

24. 美濃国府跡	18
25. 民安寺跡	19
26. 忍勝寺山古墳	20
27. 若宮古墳	20
28. 黄金古墳	20
29. 赤辺古墳	21
30. 新井中根古墳	21
31. 法華塚	21
32. 長屋氏屋敷跡	21
33. 郷学泗水庵跡	22
34. 垂井の泉	23
35. 紙屋塚	23
36. 一色八幡古墳	24
37. 勝宮古墳	24
38. 鬼塚古墳	24
39. 新井古墳	25
40. 大滝野瀬遺跡	25
41. 中山道	26
42. 岩手弾正居館跡	26
43. 府中城跡	26
44. 高札場跡／六斎市跡／本陣跡	27
45. 業平川船着場跡／表佐湊跡	27
46. 伊富岐神社跡	28
47. 中野遺跡	29
48. 大石若宮遺跡	29
49. 府中A遺跡	29
50. 府中B遺跡	30
51. 葉生笹原遺跡	30
52. 地藏石田遺跡	30
註及び参考文献	31

第2章 資料編

(1) 遺物観察表	34
(2) 遺物実測図	36
(3) 遺物写真	42

第3章 遺跡地図	53
(1) 遺跡地図	53
(2) 遺跡一覧表	93

第 1 章 調査体制と成果

(1) 調査体制

教育長	和田満
生涯学習課長	衣斐修 (H29)
	水野忠宗 (H30)
	小川裕司 (H31. 4 ～R 元 8)
	木全豊 (R 元 8 ～)
タリイピアセンター館長	栗本純治 (H30 ～R 元)
学芸企画係長	原田義久
主査	亀田剛広

【整理補助員】佐藤まさみ

【作 業 員】丹羽文雄・川地三好・岩田勝行・佐藤和夫 (故人)・辻川尚一郎・長澤
博千代・田畑勝行・西宣美・梶岡久雄

(2) 遺跡の概要

1. 菩提山城跡 ぼだいさんじょうあと (図1 採集遺物実測(1)、写真図版1)

菩提山は、標高 401.1m で伊吹山系の東端に位置し、菩提山城跡はその山頂部に築かれている。菩提山城に関する初見は、天文 13 年 (1544)、美濃守護土岐頼芸が岩手四郎に充てた書状「菩提山城之儀申出之处、即時令入城之由注進候 (後略)」であり、岩手氏によってこの頃には既に築城されていたと思われる。その後、永禄元年 (1558) に揖斐郡大御堂城主だった竹中氏が岩手氏を追放し、『竹中氏家譜』によると、「為六千貫之主、領岩手四山之外、福田、長松等、同己未歳築城於同郷菩提山」とあるように、菩提山に築城した。『竹中家雑事記』によると、「重元重治迄は岩手西福村に居住有而、城には屋形斗有之、騒動之時城に取登防の心得にいたしたる城也」とあり、豊臣秀吉の軍師として著名な竹中半兵衛重治時代までは、居館を菩提山山麓の西福村に置き、菩提山城を詰城としていたと考えられる。

規模は東西約 150m、南北約 300m で、西美濃最大級であり、二重構造の複雑な虎口、竖掘群と掘切が複雑に組み合わされた防御施設など、戦国後期の最も発展した構造を示す城郭として評価される⁽¹⁾。北に延びる尾根の末端のなだらかな平坦面は岩手氏時代の菩提山城のもので、それを竹中氏が継承発展させたのだろう。遺物は、主に主郭と副郭から採集され、播鉢、土師皿、天目茶碗などが確認された。町史跡。



主郭 (北東から)



副郭 (北から)



副郭 (北から)



掘切 (北から)

2. 田町古墳^{たまちこふん}

岩手字田町、東海道本線北側に位置する。
3 m程度の石材が数か所、露出しているのが
確認できる。



田町古墳（北から）

3. 御茶屋古墳^{おちやこふん}

岩手字谷、田町古墳すぐ北に位置する。
現在、2基が確認されており、町史によれば、
直刀・須恵器が出土したという。



御茶屋1号古墳（南から）

4. 竹中氏陣屋跡^{たけなかしじんやあと}

竹中半兵衛重治没後、嫡男重門が菩提山城
を廃して構えた陣屋（『竹中家譜』「菩提山
之城を下り、岩手作館住居之」）。正面は東側で、
大手の間口6間、奥行き3間の木造白壁塗りの
櫓門が残っている。

正徳5年（1715）、7代当主竹中重栄の記
録によると、当時の陣屋の坪割りは東辺40
間5尺、北辺37間半、西辺36間1尺、南辺
42間2尺、坪数1636坪半で、また、「岩手当



竹中氏陣屋跡（南東から）

家屋敷門の扉は、往古重門公の家臣、杉山内蔵助居宅の門なりと伝う」としている。古絵図によると門内は枳形であったようだが、現在は一文字土居が残っている。堀は埋没しているが、陣屋北側の屋敷土塁等はほぼ残されており、近世陣屋遺構の好例として重要である⁽²⁾。県史跡。

5. 伊富岐神社経塚群 いぶきじんじやきょうづかぐん (図1 採集遺物実測(1)、写真図版1～2)



伊富岐神社経塚1号(南東から)



伊富岐神社経塚1号 石仏(東から)

美濃国二宮、伊富岐神社の北方の山中に位置し、現在、経塚は2基確認されている。うち1号は、山頂部にコンクリートブロックで方形に区画された場所に、河原石が敷き詰められており、その河原石の中に一字一石経石が確認できる⁽³⁾。

また、同社には、社殿の基礎下から出土したとされる経筒や梵字土師皿(町重文)が残されている。古絵図などから、社殿は古代から現在地にあったと推定されることから、山中の経塚群とは別に神社境内地周辺に複数の経塚が存在していた可能性も考えるべきか。

この伊富岐神社経塚遺物は、大正15年(1926)、伊富岐神社の旧本殿移築のため、縁の下
の土を掘削した際に、本殿中心の土中から出土したという。遺物は経筒2点(蓋・身の2セット)、輪宝墨描皿4点、方位墨描皿4点、陶器皿1点、白磁皿2点、金属器1点で、同時に鏡も出土したようだが、今は失われている。

経筒は蓋と身がセットになっており、渥美産と美濃須衛産である。輪宝墨描皿は、陶器皿の底部内面中央に大日如来を示す「ア」の梵字を、その周囲に宝輪を墨書で描いたものである。方位墨描皿は、陶器皿の底部外面中央に「東」「西」「北」「中央」方位を墨書で描いたものである。両墨描皿が対応していることから、輪宝墨描皿の上に方位墨描皿を蓋として被せて使用していたとする説もある⁽⁴⁾。白磁皿はいずれも景德鎮窯で11世紀末から12世紀代に焼かれたものと推定されている。金属器は、香炉の柄と思われ、鉄の芯に銅が巻かれており、金箔が塗られている。上端は装飾が施され、5箇所には鋸の痕跡がある。

輪宝墨描皿と方位墨描皿が併せて出土している全国的にも稀なものであるが、出土品から年代を特定することが困難であり、おおよそ中世から近世にかけてのものと推定されている⁽⁵⁾。



伊富岐神社経塚遺物 経筒



伊富岐神社経塚遺物 輪宝墨描皿

6. ^{ながおいせき}長尾遺跡

岩手字長尾、菩提山から南へ突き出した舌状台地上に位置する。台地は東西約 250m、南北約 700m、海拔約 70～90mである。昭和 48 年（1973）に当時の垂井小学校教諭、大岡明臣氏による分布調査によって発見された。

この調査では、台地上の広範囲で石器（石鏃、スクレーパー、叩石、石錘、石斧剥片など）、縄文土器（早期～後期）、弥生土器、土師器、須恵器、鉄片、鉄滓が採集され、大規模な集落遺跡の存在が想定されている⁽⁶⁾。

しかし、今回の分布調査では遺跡が荒地化しており、遺物は確認できなかった。



長尾遺跡（東から）

7. ^{ながおこふんぐん}長尾古墳群

岩手字長尾、菩提山から南へ突き出した舌状台地の中央部に位置する。町史などによれば、4 基の古墳が存在していたというが、現在は 2 基が残る。特に 1 号墳は石室の石材が確認できる。



長尾1号古墳（東から）



長尾2号古墳（南から）

ながはたこふんぐん 8. 長畑古墳群

岩手字長畑、久保川と岩手川に挟まれた微高地上に位置する。十数基の古墳が存在していたという記録もあるが、現在、墳丘が確認できるものは2基になっている。うち、2号墳は石室の石材が確認できる。また、3・6・7号墳からは、須恵器等の遺物が出土したという。



長畑1号古墳（南東から）



長畑2号古墳（北から）

おといこふん 9. 乙井古墳

岩手字乙井に位置する。直径約16m、墳高は2mの円墳で、一部に石室の石材が確認できる。



乙井古墳（南西から）

ひがしおおいこふん 10. 東大井古墳

岩手字漆原大井に位置する。直径約 14m、墳高約 2.5m の円墳で、一部に石室の石材が確認できる。



東大井古墳（東から）

おおいしこようあと 11. 大石古窯跡

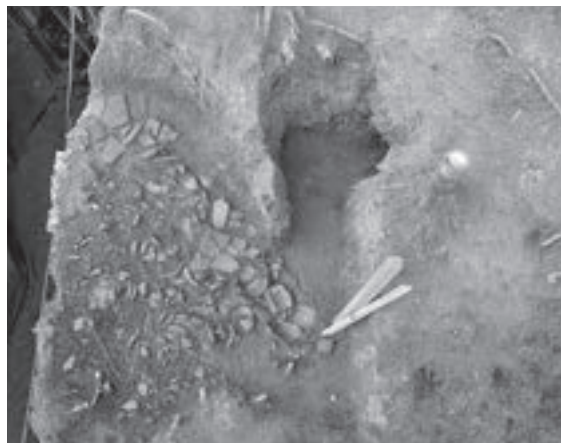
大石古窯跡は、昭和 22 年（1947）、道路拡幅工事の際に多量の瓦片が確認され、『不破郡史』の編者、藤井治左衛門氏は美濃国府の瓦を焼いた窯であると推定した。

大石古窯跡周辺は急傾斜地で、崖下に民家があることから、崖面の崩落防止対策が計画されたことを受けて、平成 20 年（2008）に範囲確認調査を行い、現在の町史跡指定部分を越えて瓦の堆積や焼土面を確認した。また、平成 21～22 年（2009～2010）には、平成 20 年の調査で確認した瓦の堆積等の広がりを確認するための試掘調査を行い、布目瓦を含む炭混じりの黒褐色層を灰原と推定している。

これらの調査結果をふまえ、平成 25 年（2013）に本発掘調査を行い、2 地区で瓦集積遺構、瓦窯遺構が確認された。また、軒丸瓦、軒平瓦が出土し、単弁十六葉蓮華文の軒丸瓦と均整唐草文という美濃国分寺創建瓦と同型の組み合わせが確認された。これらと同型の瓦は美濃国分尼寺、不破の関からも出土しており、従来、大石古窯跡は立地から美濃国府に瓦を供給していたという説が有力だったが、創業時期や供給先について新たな資料を提供している⁽⁷⁾。町史跡。



大石古窯跡（東から）



本調査時 瓦集積遺構（南東から）

12. 大滝西山古墳

大滝山から南に張り出した尾根上に位置する。これまで、直径約 10m、墳高約 1.8m の円墳と考えられてきたが、地形測量図等の解析から、南西方向に前方部をもつ、全長約 50～60m の前方後円墳の可能性が高まった。詳細は今後の調査で明らかにしていきたい。一部に石材が露出しており、町史によると、直刀、勾玉が出土したという。



大滝西山古墳（東から）

13. 大滝古墳

大滝字上屋敷に位置する。以前は石材が一部残存していたが、現在はそれも失われている。墳丘から須恵器が出土したという。



大滝古墳（北西から）

14. 野瀬古墳群

大滝字野瀬、大滝野遺跡内に位置する。5 基の古墳で構成されるが、5 号墳は滅失。3・4 号墳は一部に葺石が確認できる。昭和 54 年（1979）の圃場整備により、墳丘及び周辺部は大きく改変を受けたと考えられる（8）。



野瀬古墳群（南から）

おおいしひがしのこふんぐん
15. 大石東野古墳群

大石字東野に位置し、3基の古墳で構成される。1号墳は直径約12m、墳高約2.5mの円墳。2号墳は石室のみが現存している。3号墳は、直径約6m、墳高約1.8mの円墳で、いずれも出土品は確認されていない。



大石東野古墳群（西から）

おおたきひがしやまこふんぐん
16. 大滝東山古墳群

大滝の東山に位置し、2基の存在が確認されていたが、団地等による開発で滅失。いずれも出土品は不明。



大滝東山2号古墳（南から）

とばりこふん
17. 戸張古墳

大滝字戸張に位置する。直径約15m、墳高約2.0mの円墳で、石室が露出している。昭和20年代の地元の記録によると、直刀、かわらけ（土師器か）、勾玉が出土したという（9）。



戸張古墳（北西から）

みなみおおつかこふん
18. 南大塚古墳 (図2 採集遺物実測 (2)、写真図版2～4)

大石字大塚に所在する。昭和43年(1968)、道路工事に伴う墳丘の土砂取工事に際し、名古屋大学考古学研究室により、測量・床面調査が行われた。一辺約25.0m、墳高約6.0mの2段築成の葺石を伴う方墳で、幅約5.0mの周濠が確認できる。

内部主体は横穴式石室で、開口方向は南、玄室長さ約5.2m、同幅2.6m、同高さ2.6m、羨道長さ2.5m、同幅1.8m、同高さ1.8m、両袖式。玄室と羨道の境に鴨居石で一段下がりの前壁面をつくる。開口部は八の字に開く前庭部を持つ。前庭部は長さ5.0m、開口部幅4.2mで、墓前祭祇を行った施設であると考えられている。石室床面は、人頭大の石が敷かれている。石室の石材は極めて大きく、首長墓と考えられる⁽¹⁰⁾。

調査時に確認された遺物は、須恵器、刀子、鉄鏃及び人骨片である。石室と須恵器から古墳の築造年代は7世紀中頃と考えられる⁽¹¹⁾。



南大塚古墳 (南から)



石室の状況 名古屋大学調査時 (南から)



前庭部葺石の状況 名古屋大学調査時 (北から)



石室図面 名古屋大学調査

19. おかだどうこふん 岡田堂古墳

府中宇岡田に位置する。墳土が失われ、石材が露見しているが、前方部幅約 4.0m、墳高約 1.5m、後円部直径約 6.0m、墳高約 3.0m の前方後円墳である。付近から鉄の直刀が発見されたという⁽¹²⁾。



岡田堂古墳（南東から）

20. おやがたにこふん 親ヶ谷古墳（図3 採集遺物実測（3）、写真図版4）

標高 183m の丘陵部に位置し、濃尾平野を一望できる場所に立地する、全長 85m の前方後円墳。昭和 38 年（1963）、名古屋大学により測量調査が行われ、円墳と推定されたが、昭和 62 年（1987）に東海古墳文化研究会により再測量され、北東方向に前方部を持つ、前方後円墳である可能性が強まった⁽¹³⁾。2 段築成で、後円部上段のみ葺石を用い、埴輪は確認されていない。この親ヶ谷古墳盟主墳として、尾根上に直径 10m の清塚 1 号古墳、墳丘長 35.2m の前方後円墳の清塚 4 号古墳など、後続の首長墓が分布する。

埋葬施設は長さ 3m、幅 1m の粘土槨で、明治 11 年（1878）に盗掘された際、その北端にあった木箱の中に朱に埋まった状態で副葬品が納められていたと伝えられている。副葬品は鍬形石 1、車輪石 5、石製合子 2、石製高坏 1、石製四脚付盤 1、石製二重口縁壺 1、石製小型丸底壺 2、管玉 8、棗玉 4（鏡は所在不明）、東京国立博物館に納められている。近くに所在する矢道長塚古墳（全長 82m、前方後円墳、大垣市）から出土した鍬形石と比較すると一型式古い段階のものであることから、親ヶ谷古墳は矢道長塚古墳と同時期か、やや先行して造営されたと考えられている。およそ 4 世紀後半か⁽¹⁴⁾。

親ヶ谷古墳は、この丘陵地に 80m 級の前方後円墳を築こうとしたため、地形に左右され、前方部と後方部にズレが生じる結果になったと推定されている。関ヶ原を含む不破地区に眺望のきく好適地に、一定規模の前方後円墳を築くことは、他のあらゆる点よりも優先されたという造営意図が考えられる⁽¹⁵⁾。町史跡。



親ヶ谷古墳 後円部（南から）



前方部（南東から）

21. 清塚古墳群

市之尾字深谷、親ヶ谷古墳から東南に延びる尾根上に位置する。昭和 62 年（1987）の調査で 5 基が確認された。1 号墳は、直径約 10m、墳高約 1.3m の 2 段築成の円墳で、葺石はあるが、埴輪は確認されていない。明治 12 年（1879）に盗掘され、多数の勾玉、管玉、直刀が出土したとされる。大正 14 年（1925）には、藤井治左衛門氏により発掘され、当時の記録では、盗掘により一部破壊されていると考えられるが、内部主体は南北方向で、粘土槨、墓壙の長さ 2.4m、幅 0.9m、深さ 1.2m、内法長さ 2.1m、幅 0.54m、深さ 0.24m を測る。

2 号墳は、直径約 10.0m、墳高約 1.0m の円墳。3 号古墳は、全長 30.2m、前方部 12.0m、後円部 13.5m、くびれ部幅 7.3m、墳高約 3.0m で、葺石が確認できる前方後円墳。4 号墳も前方後円墳で、全長約 35.2m、前方部長さ約 16.7m、同幅 14.51m、同高さ約 1.5m、後円部径約 18.5m、同高さ 3.0m、くびれ部幅約 12.0m。造出、周濠はないが、葺石は確認できる。埴輪はない。親ヶ谷古墳に次ぐ首長墓と考えられる。5 号墳は円墳。いずれも副葬品は不明である。



清塚 1 号古墳（南から）



清塚 1 号古墳 葺石状況（南から）



清塚 2 号古墳（東から）



清塚 4 号古墳（東から）

22. 綾戸古墳

直径約40mの円墳で、周囲に幅8～11mの周濠がめぐり、東側には矢道長塚古墳（全長82m、前方後円墳、大垣市）が立地している。かつては横穴式石室が開口しており、古墳時代終末期の造営と推定される。周濠は明治の中頃まで現在より60cm程深く、水が湛えられていたという⁽¹⁶⁾。平成6年（1994）には台風による倒木の根部に葺石の一部が確認されている。付近から出土したと伝えられる須恵器の三足壺が現在、関ヶ原町歴史民俗資料館に所蔵されており、もとは『不破郡史』の編者、藤井治左衛門氏の所蔵だったという。藤井氏の記録によると、鏡も出土したという⁽¹⁷⁾。

なお、かつて頂上部には「熊坂長範物見の松」といわれる松があり、寛文7年（1667）の綾戸村絵図（町重文、しょうげん塚付古絵図）にも塚上の松が描かれている。熊坂長範は平安時代後期の大盗賊といわれる伝説上の人物で、盗みをはたらくため、街道を通る旅人を、この松から見張っていたという言い伝えがある。また、この松は、平将門調伏の祈禱をした時の幣を掛けたため、「幣掛けの松」ともよばれていた。町史跡。



綾戸古墳（南から）

23. 喪山古墳

僧都山・送葬山とも呼ばれ、『日本書紀』神代下や『古事記』天若日子の段、『先代旧事本紀』天神本紀にみえる喪山神話の「美濃国の喪山」とする説がある。

この神話の「美濃国の藍見河の上にある喪山」の所在地について、主に2つの説が出されてきた。1つは垂井説で、文化2年（1805）刊行の『木曾路名所図会』に喪山は垂井宿の東、相川を越えたところにある小さな山であるとしている。もう1つは、武儀郡大矢田村（現美濃市）にある大矢田神社を中心とした一帯にあるとする説で、「藍見川」を長良川あるいはその支流の古称であるとする⁽¹⁸⁾。

現地は、東西約120m、南北約90mで、山頂部に英霊碑が建てられている。墳丘が3基ほどあったというが、詳細は不明。町史跡。



喪山古墳（北から）

24. 美濃国府跡

国府は、古代における地方統治の拠点であり、地方と中央の律令国家を結ぶ重要な場所であった。国府には、国内から中央に税として貢納される品々が集められたほか、戸籍の作成や、祭礼・軍事・寺社や僧尼の把握等を管掌していたと考えられる。

美濃国府の所在地については、平安時代に編纂された『和名類聚抄』に不破郡にあったとの注記が見られ、不破郡垂井町に「府中」という地名が残ることなどから、垂井町府中地区と考えられていた。昭和 32 年（1957）、府中郷土史研究会の見解に基づき安立寺が美濃国府跡として町指定史跡となり、それを足がかりに昭和 30～40 年代には、歴史地理学者の藤岡謙二郎氏や水野時二氏らによって、安立寺を中心とした方八町（東西約 400m、南北約 430m）の国府域が想定された⁽¹⁹⁾。

その後、垂井町教育委員会と三重大学により平成 3 年度（1991）から平成 15 年度（2003）にかけ、範囲確認のための発掘調査が継続的に実施された。調査により、南宮御旅神社付近において、東西 67.2m、南北 73.5m の掘立柱塀で区画された政庁が確認された。政庁内部には桁行 2 間（6.6m）、梁行 5 間（18m）の身舎に四面廂が巡る正殿があり、その南方に桁行 9 間、梁行 2 間で南北に細長い西脇殿、東脇殿の 3 棟の建物跡が発見され、「品」字型の配置になっていることが分かった。正殿、脇殿ともに、ほぼ同位置での建て替えを 2 度行っており、当初は掘立柱建物で、一度目の建て替えは同じ掘立柱建物、奈良時代後半頃の 2 度目の建て替えの際に礎石建物に改築している。他の国府に比べて上国であることからすると規模が小さく、正殿の西北では東西棟と推定される掘立柱建物の一部を検出しているが、前殿、後殿などの施設を持たないなどの相違点が見られる。政庁の存続時期は、出土遺物から 8 世紀の中頃から 10 世紀中頃と考えられる。

その他、政庁跡の南側には朱雀路（幅約 18m の南北道路）があり、政庁南辺より 72m 南の地点で東側溝が東に曲がることから、東西道路へ接続していたと想定される。朱雀路の南端には大形の掘立柱柱穴が 1 個あり、儀式の際に幡を掲げた幢竿状の施設ではないかと考えられている。また、政庁跡東側には東方官衙地区（美濃国府の実務機能を担ったと考えられる官衙域）も確認された。東方官衙地区から出土した遺物には土器、硯、土馬、瓦埴類等があり、官衙的様相を示しており、西区画溝からは「政所」、国庁の北方では「曹」と記した墨書土器も出土しており、その地区の性格を示唆している。また、政庁の北方では総柱掘立柱建物を検出しており、国府に関連する官衙が周辺に広がっていると想定できる⁽²⁰⁾。

美濃国府跡は政庁等、主要な施設の配置がほぼ判明し、国の中枢である政庁をはじめとした国府の造営と変遷の実態をよく示すとともに、古代美濃国の政治情勢を考えるうえでも貴重であることから、平成 18 年（2006）1 月 26 日、国の史跡に指定された。



美濃国府跡（南から）



第6次調査 東脇殿（南西から）

25. 民安寺跡

民安寺は前関白二条良基が、京都を逃れた北朝後光厳天皇とともに小島（現揖斐川町）の行宮で数ヶ月を過ごし、天皇の京都還幸まで奉仕した記録である『小島のすさみ』によると、文和2年（1353）、後光厳天皇が垂井へ逃れた際、「夜に入りて尚おびたしく吹き増る風唯事ならず、頓宮は黒木の柱なれば、民安寺と云う所へ臨幸あり」とあるように、一夜の嵐を避けたとされる寺である。しかし、その場所や創建・廃寺の時期は明らかになっていない。『東大寺古写本観心覚夢鈔奥書』には、「干時応長壬子之曆季春、廿五之天、於濃州不破郡垂井民安寺之蘭室、始自昨日千之一点、染江南紫毫之筆畢」とあり、一条兼良の紀行文『藤川の記』には「(文明5年) 鏡島をたちて、もとの路をへて垂井に至る。民安寺と云律院にとまる」というように、民安寺は垂井の地（現垂井町垂井）にあったと記載されている。以上の理由から『不破郡史』は垂井町御所野、『岐阜県史蹟名勝天然紀念物報告書』は古老の話として、垂井金蓮寺の地に民安寺があったとする説をとる。いずれも確たる証拠には乏しいが、応長年間（1311～1312）から文明5年（1473）までは垂井に存在し、その後、現在の垂井町府中に移ったことは確かだろう。府中南宮大社御旅所北、元の館守神社西側の区画を「民安寺」と称していたという。

また、民安寺のものと伝えられる石燈籠（町重文）が存在し、台石とその上の竿石のみ現存している。御影石製、高さ105 cm、幅100 cm、奥行56 cmで、至徳3年（1386）の以下のような刻銘がある。「民安寺 燈供三寶 開本地明 光與明 普利群生 至徳三年丙寅八月日 願主 理宗敬白」



民安寺石燈籠（南から）

26. 忍勝寺山古墳

大滝川と大石川に挟まれた扇央部に位置する、墳丘長約 60m 古墳。従来は円墳と考えられていたが、航空写真や大正時代の字絵図から通常の前方後円墳と比べ前方部が極端に短い帆立貝形前方後円墳の可能性が指摘されている⁽²¹⁾。

現在、墳頂部は平坦に整地されており、周りに石垣が積まれ、周濠も埋められている。大正年間に発掘されたと伝えられ、竪穴式石室であったとも言われているが詳細は不明である。その際、鉄鏃、銅鏃、直刀片、香炉状のもの（石製合子か）が出土したという。五世紀前半の造営か。江戸時代末期の古絵図には「ね里塚」と記されている。町史跡。



忍勝寺山古墳（南から）

27. 若宮古墳

府中字野庵に位置し、平成 3 年（1991）、町道拡幅に伴い、三重大学考古学研究室によって、範囲確認調査が行われた⁽²²⁾。直径約 13.0m、墳高約 3.0m、葺石はあり、円筒埴輪片が 3 点出土している。



若宮古墳（南東から）

28. 黄金古墳

府中字野庵に位置する。耕地整理によって墳丘は削平されているが、それ以前までは、直径約 6.0m、墳高約 0.5m 程度の墳丘が確認できたという。



黄金古墳（南西から）

29. 赤辺古墳^{あかべこふん}

新井字赤辺に位置する。ほ場整備や住宅開発によって墳丘は削平され、旧状は不明である。



赤辺古墳（北東から）

30. 新井中根古墳^{あらいなかねこふん}

新井字中根に位置する。野庵町営住宅建設に伴い破壊された。

31. 法華塚^{ほっけづか}

垂井字幸和に所在する。日蓮宗の開祖、日蓮の孫弟子にあたる日目が、正慶2年（1333）、西国布教の途中、病で垂井宿で没した。弟子の日尊、日郷は日目の遺骸を茶毘に付して、その地に法華塚を作ったという。しかし、茶毘所については垂井町府中説もある⁽²³⁾。



法華塚（東から）

32. 長屋氏屋敷跡^{ながやしやしきあと}

長屋氏の祖先は相模国から鎌倉時代中頃の景頼の時に垂井に移ったとされ、室町時代後期の景興のとき大野郡相羽に本拠地を移すが、次男景重が垂井城を受け継いだ。天文16年（1547）、景興が斎藤道三に攻められて滅び、垂井の長屋氏もその後の史料にはみられなく

なる。『太平記』や『小島のすさみ』には垂井の宿の長者の家として登場し、京を逃れた後光厳天皇の行在所となり、鎌倉から上洛する足利尊氏の宿ともなった。屋敷跡近くに位置する八尺堂の石仏は、屋敷跡付近でみつかったもので、長屋氏と関係があると伝えられている。長屋氏の歴代墓は同族とされる長江氏の菩提寺関ヶ原今須妙応寺にある。

天明8年(1788)に建てられた石碑には屋敷敷地が1町3反歩(1.3ha)あったといい、現在の石碑所在地を中心とした東西140m・南北70～100mの方形区画は、北側を除く外周を幅7～14mの細長い畑で囲まれており、この区画の面積は石碑の記述とほぼ一致する⁽²⁴⁾。石碑の刻銘は次のとおりである。「鎌倉権五郎平景政七世之孫長屋小四郎景頼承久之乱自相州来遠州宗秀宗房景家景国景森景元景教将監景重至天文九世住足尺并此所即其旧地也今敷地一町三反歩」。町史跡。



長屋氏屋敷跡（南東から）

33. 郷学泗水庵跡

泗水庵は江戸時代の儒学者、櫛原^{いちばら}^{せつさい}が創設した私塾。梶斎は享保8年(1723)の生まれで、名は篤好、通称は主佐・修助といい、号を梶斎と称した。家業は代々垂井宿本陣をつとめ、酒造業も営んだ。梶斎は30歳のころ、家督を子に譲り、自身は京に出て久米訂斎に学んだ。その後、訂斎の有数の弟子となった梶斎は、明和8年(1771)、郷里の垂井に明倫堂を建立し子弟を教育した。安永3年(1774)には明倫堂を垂井の清水のほとりに改築して泗水庵と称し、三宅尚斎著の白雀録・狼蹙録など儒学の書を集めた。

梶斎は約30年間にわたって子弟に崎門学派の儒学を教え、寛政12年(1800)、78歳で没し、垂井専精寺に葬られた。梶斎没後、泗水庵は同門の合田恒斎が継いだ。文化12年(1815)、西町の大火により半焼して再建不可能となり、恒斎は江州坂田郡樋口村(現滋賀県米原市)へ帰って、泗水庵は廃絶した。町史跡。



郷学泗水庵跡（東から）

34. 垂井の泉

垂井の泉は、玉泉寺の門前南側から湧き出ており、井口は、約2m四方で、周囲に石玉垣をめぐらしている。傍らに「垂井之泉」の四文字が刻まれた碑が建っている。この泉は『続日本紀』天平12年（740）12月癸丑朔条にみえる聖武天皇が行幸した「宮処寺及曳常泉」の「曳常泉」にあたとされる。

また、垂井の地名の起源ともされ、その初見は11世紀に美濃国司を務めた藤原隆経の「昔見し たる井の水はかはらねど うつれる影ぞ 年をへにける」という詠歌が知られる。その後も一条兼良の『藤川の記』に「たる井の水」がみえ、松尾芭蕉は元禄4年（1691）、この泉を訪れ「葱白く洗ひあげたる寒さかな」の句を残している。明和8年（1771）には垂井宿本陣家出生の儒学者、櫟原菴斎が泉のほとりに泗水庵を建て、菴斎は安永4年（1775）に芭蕉の句碑も建立している。

また、秋里離里が文化2年（1805）に著した『木曾路名所図会』には、「此清水は特に清冷にして味はひ甘く、寒暑に増減なし、ゆききの人渴をしのぐに足れり」とあり、専精寺所蔵で、天保8年（1837）に信州の国学者岩下貞融が書いた垂井泉碑文には、垂井の水は養老に勝るとしている。

天明年間（1781～1789）に庭園化し、明治18年（1885）に垂井神社や石橋などが整備された。なお、垂井の泉とともに町のシンボルであった垂井の大ケヤキは平成27年（2015）の台風によって倒木した。県史跡。



垂井の泉（東から）

35. 紙屋塚

垂井の泉の東方、通称神矢町にあり、『美濃国神名帳』の「従五位下紙屋明神」に比定されている。

古代において紙は美濃絶などの繊維製品とともに美濃国の特産物であった。正倉院に残された大宝2年（702）御野国戸籍の料紙は、同年の西海道の戸籍と比較して上質であることが指摘されている。

『延喜式』内蔵寮式によれば、図書寮が供



紙屋塚（南から）

給する年料の色紙 4,600 張は、毎年図書長上一人を美濃国に派遣して製造することになっていた。また、藤原行成の日記である『権記』には、長保 4 年（1002）2 月 1 日に「召_レ奉親宿祢_ニ、付_レ美濃国紙屋長上宇保良信解文_ニ、尋_レ先例_ニ可_レ進上_ニ之由示_レ之」とあることから、美濃国に「紙屋」と呼ばれる製紙工房が存在していたと考えられる。町史跡。

36. 一色八幡古墳

表佐字一色に位置する。直径約 15m、墳高約 2.0m の円墳で、墳丘上に神社が設けられている。葺石は確認できない。



一色八幡古墳（南から）

37. 勝宮古墳

相川が東から南へ流れを変える地点に立地する、全長約 30m の前方後円墳。相川の氾濫のため周囲の地形が著しく改変されており、現在は後円部と思われる部分のみ現存している。昭和 10 年代には、古墳の周囲 15～20m 付近の地中 3～5m のところから粘土に混じって須恵器や土師器の破片が出土したという（25）。

勝神社社殿の本殿北に接して位置しており、氏子からは勝神社の祭神、筑後玉垂命（武内宿禰）の墓として信仰を受けている。町史跡。



勝宮古墳（西から）

38. 鬼塚古墳

表佐字福寿、集落内に位置する。平成元年（1989）、付近の農道整備の際、土塁状の高ま

り及び周濠の一部が確認されている。また、過去には墳丘部から遺物が採取されている⁽²⁶⁾。



鬼塚古墳（北から）



鬼塚古墳 周濠（南から）

39. ^{あらいこふん}新井古墳

新井字堂田、東海道本線すぐ南に位置する。直径約 16.0m、墳高約 3.0m の円墳で、葺石は確認できない。



新井古墳（北から）

40. ^{おおたきの せいせき}大滝野瀬遺跡

大滝字野瀬、大滝川と大石川に挟まれた扇状地上に位置する。昭和 54 年（1979）の圃場整備に伴う緊急的な分布調査で遺跡の存在が認識され、表土下に黒色土の遺物包含層を確認している。

この調査では、石器（石鏃、スクレーパー、石匙、叩石、石錘、石斧、剥片など）、縄文土器（中期～晩期）、弥生土器、土師器、須恵器が採集され、大規模な集落遺跡の存在が想定されている⁽²⁷⁾。



大滝野瀬遺跡（南から）

なかせんどう 41. 中山道

江戸時代の五街道の一つで、江戸日本橋と京都の三条大橋を結ぶ内陸街道。基本的に中世までの東山道を継承する形で整備された。

垂井町内を東西に横断しており、少なくとも、青野宿から美濃路追分付近までは東山道と重なっているものと考えられる。

また、中山道沿いの日守には、垂井一里塚が残存している。



中山道（西から）

いわでだんじょうきょかんあと 42. 岩手弾正居館跡

岩手字漆原に位置し、居館跡の伝承地には、近年まで大椿が立っていた。岩手氏は当該地の中世領主で、菩提山城を築城、永禄年間に、竹中氏によって追放されるまで、江濃の要衝のこの地で存在感を発揮した。

伝承地周辺は、城館の一角と推定される方形の地割りが明治の字絵図などから確認できる⁽²⁸⁾。

分布調査で遺物は採集できなかった。



岩手弾正居館跡（北西から）

ふちゅうじょうあと 43. 府中城跡

美濃国府跡すぐ東側に位置する。「堀之内」の私称地名や、以前は土塁や堀が一部残されており、過去には土塁の断割調査も行われている。⁽²⁹⁾

平成31年（2019）に行った宅地開発に伴う試掘確認調査では、近世の屋敷地の下層から中世に属する柵列や整地層のほか、四周の道路沿いに堀跡を確認した。いずれも中世の府中城に関係する遺構と考えられる。



府中城跡試掘確認調査 柵列状況（南東から）

こうさつばあと ろくさいいちあと ほんじんあと
44. 高札場跡／六斎市跡／本陣跡

近世の中山道垂井宿に関する宿場遺跡である。高札場は天保2年(1831)の絵図によると、本龍寺前にあった。六斎市は毎月5と9の日に南宮神社鳥居付近で開かれた。本陣跡は宿場の中ほどに位置し⁽³⁰⁾、寛政12年(1800)の記録によれば、建物坪数は178坪で、安永9年(1780)に一度焼失している。



高札場跡（南から）



六斎市跡（北東から）



本陣跡（北から）

なりひらがわふなつきばあと おさみなとあと
45. 業平川船着場跡／表佐湊跡

近世の河川関係遺跡である。特に表佐湊は、竹中重門が伏見城建設の際、資材を運搬するなど、活発に使用されたと考えられ、昭和50年代の土地改良の際に、天保通宝等の銭貨が出土したという⁽³¹⁾。現在、遺物や遺構は確認できない。



業平川船着場跡（北西から）



表佐湊跡（南から）

46. 伊富岐神社跡

伊富岐神社は、『延喜式』には「伊富岐神社」、『美濃国神名帳』には「正一位伊福貴大明神」とみえる。『文徳天皇実録』仁寿2年（852）12月癸亥条に「美濃国伊富岐神」とみえ、官社に列せられ、『日本三代実録』貞観7年（865）に従四位下、元慶元年（877）に従四位上を授けられている。祭神については諸説あるが、『新撰姓氏録』左京神別下に「伊福部宿祢、尾張連同祖、火明命之後也」とあるように、天火明命＝伊福部氏の祖神を祀ったとする。伊福部氏は古代にこの地に勢力をもった豪族で、踏鞴をつかさどる製鉄関係の職業部（鍛冶部）とする説や、天皇や皇族の食事や湯を用意する火吹部説、五百木入日子（景行天皇皇子）の名代とする説などがあるがいずれも定かでない。

伊富岐神社の古絵図「伊富岐神社古絵図（町重文）」は、制作年代が不明なものの、本殿、拝殿、「正四位下一ノ御子」等の末社、鳥居や大杉、奥之院跡などがみえる。伊富岐神社の古絵図はほかにもいくつか確認されており、『不破郡史』に引かれているものは、天平20年（748）の絵図を慶長13年（1608）に書写したものであるという（『不破郡史』編者は鎌倉以降の境内図であろうとする）。伊富岐神社の社殿は慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで全焼したといわれており、当社所蔵の棟札によると慶長11年（1606）に再建されている。

表採調査で遺物は確認できなかったが、聞き取り調査によれば、戦後、境内地での土取の際、灰色の土器が出土したという。



伊富岐神社跡（南から）

なかのいせき
47. 中野遺跡（図4採集遺物実測（4）、写真図版6）

大石字中野、大石川東側、東海道本線すぐ北の扇状地上に位置する。これまでに、灰釉陶器、山茶碗が採集されており、今回の分布調査でも同様の遺物を多数確認した。



中野遺跡（北西から）

おおいしわかみやいせき
48. 大石若宮遺跡（図4採集遺物実測（4）、写真図版6）

大石字若宮、中野遺跡の北東に位置する。今回の分布調査で山茶碗が集中して確認された。



大石若宮遺跡（南東から）

ふちゅうえーいせき
49. 府中A遺跡（図4採集遺物実測（4）～図5採集遺物実測（5）、写真図版6～7）

美濃国府跡東側に位置する。今回の分布調査では、奈良時代の須恵器のほか、灰釉陶器、山茶碗が多く採集された。

隣接地で昭和30年代に行われた区画整理の際、多量の土器（土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗）が表土下の粘土質黒色土から出土したという。



府中A遺跡（北東から）

^{ふちゅうびーいせき}
50. 府中B遺跡 (図5 採集遺物実測 (5)、写真図版8～9)

美濃国府跡北側に位置する。今回の分布調査では、府中A遺跡と同様に、奈良時代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗を多く確認した。

これまでも国府北方の工事立会や試掘調査で、国府域外に広がる可能性のある古代末から中世の遺跡の存在が推定されており、表採による分布調査の結果もそれを裏付けている。



府中B遺跡 (南西から)

^{はぶさきはらいせき}
51. 葉生笹原遺跡 (図6 採集遺物実測 (6)、写真図版9)

府中字葉生及び垂井字笹原、喪山古墳西側に位置する。もとは、民安寺・徳法寺が所在したという伝承も残る場所だが、詳細は不明。

今回の分布調査では、奈良時代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗を確認した。



葉生笹原遺跡 (北東から)

^{じぞういしだいせき}
52. 地藏石田遺跡 (図6 採集遺物実測 (6)、写真図版10)

表佐地藏橋東南、相川が南に湾曲する左岸側の微高地上に位置する。伊勢湾台風後に河川改修が行われる以前までは、現在の堤防付近まで、微高地形を利用した砂質土の畑地だったという。

今回の分布調査で奈良時代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗を確認した。



地藏石田遺跡 (北西から)

註及び参考文献

- (1) 『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第1集(西濃地区・本巣郡)、中井均氏執筆部分、岐阜県教育委員会、2002年、『垂井町指定史跡 菩提山城遺跡 測量調査報告書』垂井町教育委員会、1980年
- (2) (1) 中井論文
- (3) 一字一石経塚に関しては、『経塚とその遺物』日本の美術 292号、至文堂、1990年、『清水経塚 市道中恵土広見線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』可児市教育委員会、1999年等参照
- (4) 水野正好「近世の地鎮・鎮壇」『古代研究 28-29』元興寺文化財研究所、1984年
- (5) 小野木学「岐阜県の経塚に関する覚書」『美濃の考古学』、美濃の考古学刊行会、2009年
- (6) 大岡明臣『長尾遺跡調査とその考察』垂井町教育委員会、1976年
- (7) 『大石古窯跡発掘調査報告』垂井町教育委員会、2013年
- (8) 大岡明臣『大滝野瀬遺跡調査とその考察』垂井町教育委員会、1981年
- (9) 『府中村のあゆみ』第2号、府中郷土史研究会、1953年
- (10) 中井正幸『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会、大衆書房、1992年、同「後期古墳と横穴式石室の特質」『東海古墳文化の研究』雄山閣、2005年
- (11) 中井正幸「美濃における古墳群の形成とその展開」『東海古墳文化の研究』雄山閣、2005年
- (12) 『府中村のあゆみ』第12号、府中郷土史研究会、1960年
- (13) 赤塚次郎・中井正幸・中司照世(東海古墳文化研究会)「岐阜県西濃地方の前方後(円)墳の測量調査」『古代』第86号、早稲田大学考古学会、1988年
- (14) 中井正幸「石製祭器から読みとる葬送儀礼」『東海古墳文化の研究』雄山閣、2005年
- (15) 中井正幸「岐阜県西濃地方の前方後円墳」『古代』第86号、早稲田大学考古学会、1988年)、同「大垣地域の前期古墳」『美濃の前期古墳－前方後方墳のルーツを問う－』美濃古墳文化研究会、教育出版文化協会、1990年
- (16) 『岐阜県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第9輯、岐阜県、1972年
- (17) 出目地山古墳出土とされているもので、面経は6.1cm。中井(11)論文註(23)
- (18) 羽賀祥二「泳宮と喪山－美濃における古代伝説と遺蹟」『名古屋大学文学部研究論集史学』43、名古屋大学文学部、1997年
- (19) 藤岡謙二郎「古代の政治地域と国府・郡家と関所－美濃国の場合－」『日本歴史地理序説』塙書房、1962年
- (20) 『美濃国府跡発掘調査報告書Ⅰ 付 若宮古墳範囲確認調査報告』垂井町教育委員会・三重大学考古学研究所、1996年、『美濃国府跡発掘調査報告書Ⅱ』垂井町教育委員会・三重大学考古学研究所、1999年、『美濃国府跡発掘調査報告書Ⅲ』垂井町教育委員会、2005年
- (21) 中井正幸「西濃地域の首長墓系譜と前期古墳」『大垣市埋蔵文化財調査概要－昭和63年度』大垣市文化財調査報告書第16集、大垣市教育委員会、1990年
- (22) (20) 調査報告書Ⅰ
- (23) 太田三郎「垂井の日目庵について」『垂井の文化財』第28集、垂井町文化財保護協会、2004年
- (24) (1) 論文、横幕執筆部分

- (25) 中嶋健之「勝神社と古墳」『垂井の文化財』第3集、垂井町文化財保護協会、1978年
- (26) 藤墳芳美「鬼塚と福寿寺縁起」『垂井の文化財』第15集、垂井町文化財保護協会、1991年
- (27) (8) 論文
- (28) (1) 論文、横幕執筆部分
- (29) 衣斐守「府中・堀之内不破家の土塁について」『垂井の文化財』第7集、垂井町文化財保護協会、1982年
- (30) 鈴木隆雄『旧街道 宿場建物紀行 一西濃の美濃路・中山道を歩く一』(資) 垂井日之出印刷所、2005年
- (31) 川合光夫「表佐湊今昔」『垂井の文化財』第13集、垂井町文化財保護協会、1988年

第2章 資料編

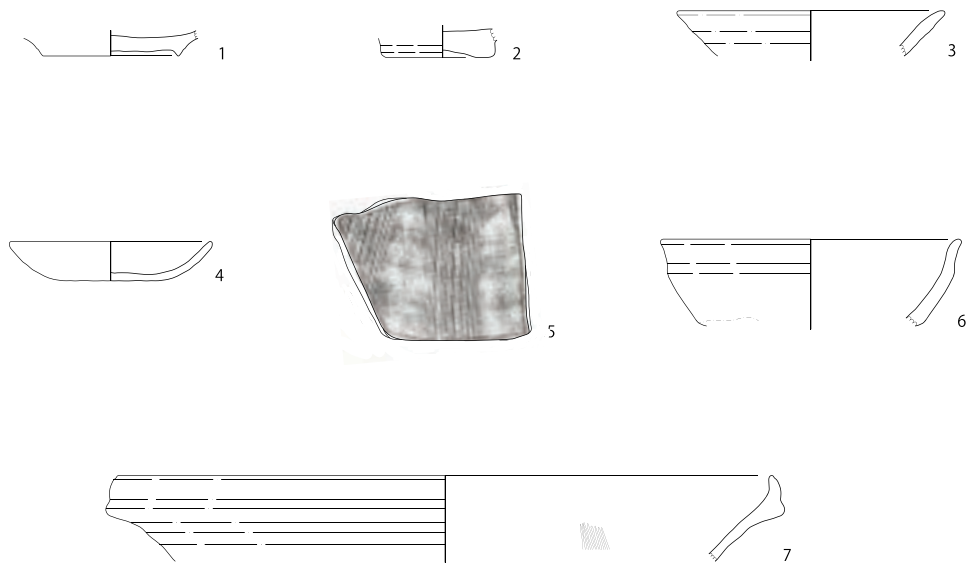
(1) 遺物観察表

整理番号	遺物番号	種類	器種	法量 (cm)	備考
菩提山城跡					
1	菩提山城跡17			底径5.8	大窯
2	菩提山城跡16	天目茶碗	碗	底径4.0	大窯
3	菩提山城跡12	天目茶碗	碗	口径10.6	大窯
4	菩提山城跡26	かわらけ (土師皿)		口径8.0、器高1.6	
5	菩提山城跡2	播鉢	播鉢		大窯
6	菩提山城跡11	天目茶碗	碗	口径11.8	大窯
7	菩提山城跡25	播鉢	播鉢	口径26.6	大窯
伊富岐神社経塚群 (1号)					
1	06-2	一字一石経石	経石	縦4.7、横3.2	「聲」
2	06-8(1)	一字一石経石	経石	縦4.1、横3.0	「但」
3	06-8(2)	一字一石経石	経石	縦4.9、横3.0	「佛」
4	06-9	近世陶器?	骨蔵器	底径12.8	
5	06-12	山茶碗	碗	底径5.6	尾張4~5型式
6	06-13	常滑	甕か		常滑8~9型式
南大塚古墳					
1	南大塚名大整理(6)	須恵器	ハソウ		TK209~TK217
2	南大塚名大整理(4)	須恵器	坏身	口径8.8、器高4.1	TK209~TK217
3	南大塚名大整理(5)	須恵器	高杯	口径11.0、底径9.0、器高10.6	TK209~TK217
4	南大塚名大整理(7)	須恵器	長頸壺	口径9.0、器高16.5	TK209~TK217
5	南大塚名大整理(2)	須恵器	短頸壺	口径9.8、器高17.7	TK209~TK217
6	南大塚名大整理(1)	須恵器	長頸壺(台付)	口径7.0、底径8.8、器高20.9	TK209~TK217
7	南大塚名大整理(3)	須恵器	長頸壺(台付)	口径10.0	TK209~TK217
8	南大塚名大整理(8)	土師器	壺	口径11.8	
9	南大塚名大整理(9)	土師器	壺	口径13.9、器高16.0	
親ヶ谷古墳					
1	親ヶ谷古墳(1)	石製品	鍬形石か		
2	親ヶ谷古墳(2)	石製品	車輪石		中井Ⅱ類
鬼塚古墳					
1	富田寄贈(3)	須恵器	坏蓋	口径15.0、器高4.3	美濃須衛Ⅳ-1
2	富田寄贈(1)	須恵器	無台坏身	底径7.2	美濃須衛Ⅳ-1
3	富田寄贈(4)	須恵器	壺か	口径18.0	美濃須衛Ⅳ-1
4	富田寄贈(2)	須恵器	甕	底径18.6	美濃須衛Ⅳ-1
5	富田寄贈(5)	土師器	甕	底径22.8	
6	富田寄贈(7)	土師器	高杯		
7	富田寄贈(6)	土師器	壺	口径35.4	
中野遺跡					
1	川地採集(1)	灰釉陶器	碗	底径6.8	H72
2	川地採集(3)	灰釉陶器	碗	底径7.2	K90~053
3	川地採集(2)	山茶碗	碗	底径8.6	尾張4~5型式
大石若宮					
1	L9-64	山茶碗	碗	底径7.2	尾張5型式
2	L9-84	山茶碗	碗	底径6.4	尾張5型式
府中A遺跡					
1	012-32	須恵器	有台坏身	底径5.6	美濃須衛Ⅳ-2~Ⅴ
2	013-96	須恵器	有台坏身	底径11.0	美濃須衛Ⅳ-2
3	012-6(2)	須恵器	有台坏身	底径9.4	美濃須衛Ⅳ-3~Ⅴ
4	012-43	須恵器	有台坏身	底径7.2	美濃須衛Ⅳ-1
5	012-65(4)	須恵器	有台坏身	底径10.6	美濃須衛Ⅳ-1
6	012-6(1)	須恵器	碗か	口径25.6	美濃須衛Ⅳ-1
7	012-6(3)	灰釉陶器	碗	底径5.2	K90~053
8	012-17(1)	灰釉陶器	碗	底径7.8	K90~053
9	012-28	灰釉陶器	碗	底径6.8	K90~053
10	012-6(4)	灰釉陶器	碗	口径10.1	K90~053
11	012-8(2)	灰釉陶器	碗	底径6.4	K90~053
12	012-52	灰釉陶器	碗	底径7.0	百代
13	012-8(1)	灰釉陶器	碗	底径6.4	H72~百代
14	013-97	灰釉陶器	碗	底径8.0	H72~百代
15	012-57	灰釉陶器	碗	口径16.0	K90~053
16	N12-22	山茶碗	碗	底径5.2	尾張4~5型式
17	012-67	山茶碗	碗	底径7.2	尾張5型式

18	012-65(2)	山茶碗	碗	底径6.4	尾張4～5型式
19	012-65(3)	山茶碗	碗	底径7.4	尾張4～5型式
20	012-54	山茶碗	碗	底径7.6	尾張6～7型式
21	012-65(1)	山茶碗	碗	底径7.8	尾張4～5型式
22	012-33	山茶碗	碗	底径8.4	尾張3型式
23	012-30	山茶碗	碗	底径8.6	尾張4～5型式
24	012-17(2)	山茶碗	碗	底径7.6	尾張6～7型式
府中B遺跡					
1	012-85(1)	須恵器	坏蓋	つまみ部径2.1	美濃須衛IV-1
2	N12-51	須恵器	碗	口径14.6	美濃須衛V
3	012-73	須恵器	有台坏身	底径10.0	美濃須衛IV-2
4	012-85(2)	須恵器	碗	底径9.8	美濃須衛IV-3～V
5	012-76(2)	灰釉陶器	碗	底径5.6	H72～百代
6	012-76(1)	灰釉陶器	碗	底径6.0	O53～H72
7	N12-65	灰釉陶器	碗	底径6.2	H72～百代
8	N12-54(2)	灰釉陶器	碗	底径8.0	百代
9	N12-54(1)	灰釉陶器	碗	底径6.6	K90～O53～H72
10	N12-50	灰釉陶器	碗	底径8.2	百代
11	N11-21	灰釉陶器	碗	底径7.0	百代
12	N12-45(1)	灰釉陶器	碗	底径7.0	百代
13	012-78	灰釉陶器	碗	底径5.8	K90～O53～H72
14	N12-47	山茶碗	山皿	底径3.6	
15	N12-48(2)	山茶碗	碗	底径4.8	尾張3型式
16	012-74	山茶碗	碗	底径5.2	尾張4～5型式
17	N12-45(2)	山茶碗	碗	底径4.8	尾張4～5型式
18	012-77	山茶碗	碗	底径7.2	尾張4～5型式
19	N12-48(1)	山茶碗	碗	底径7.4	尾張6～7型式
20	N12-69	古瀬戸	鉢	底径12.2	片口鉢6～7型式か
葉生笹原遺跡					
1	小竹寄贈(3)	山茶碗	碗	底径6.2	尾張4～5型式
2	小竹寄贈(2)	山茶碗	碗	底径7.2	尾張4～5型式
3	014-59	須恵器	無台坏身	底径7.0	美濃須衛IV-1
4	小竹寄贈(1)	須恵器	長頸壺か	底径13.4	美濃須衛IV-3
5	014-110	須恵器	有台坏身	底径9.6	美濃須衛IV-1
6	014-109	灰釉陶器	碗	底径6.6	K90～O53
7	013-2	灰釉陶器	碗	底径6.0	K90～O53
8	014-67	灰釉陶器	碗	底径8.0	K90～O53
9	014-94	灰釉陶器	碗	底径6.6	K90～O53
10	N14-37	灰釉陶器	碗	底径7.0	K90～O53
11	014-102	灰釉陶器	碗	底径8.0	K90～O53
12	014-72	灰釉陶器	碗	底径7.8	K90～O53
地藏石田遺跡					
1	S17-21	山茶碗	碗	底径7.6	尾張4～5型式
2	S17-18(1)	須恵器	有台坏身	口径14.0、底径10.4、器高4.3	美濃須衛IV-1
3	S17-11	灰釉陶器	碗	底径6.6	百代
4	S17-18(2)	灰釉陶器	碗	底径5.6	H72
5	S17-24	灰釉陶器	碗	口径11.0、底径6.0、器高2.1	H72

(2) 遺物実測図

菩提山城跡



伊富岐神社経塚群（1号）

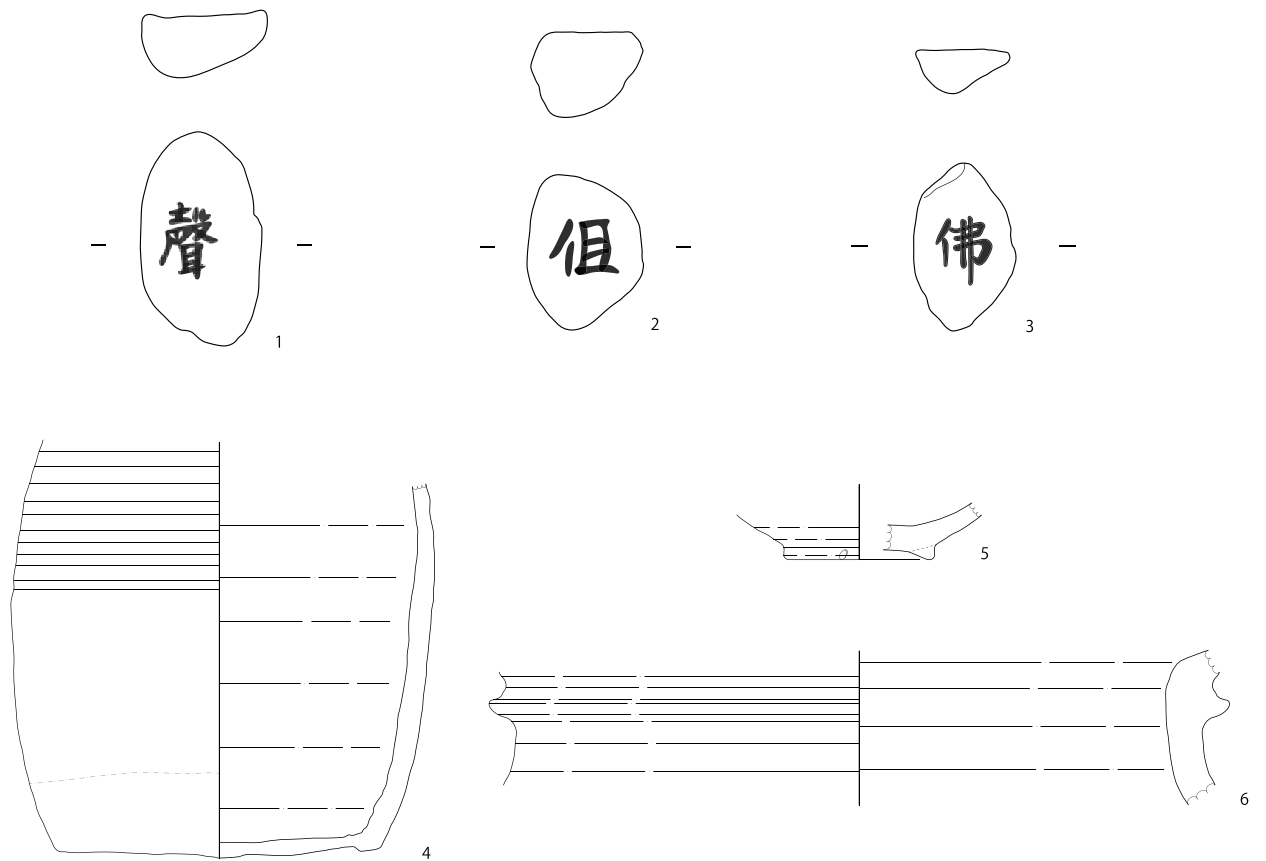


図1 採集遺物実測図(1)

0 10 cm
(S=1/3)
伊富岐神社経塚1~3 (S=1/2)

南大塚古墳

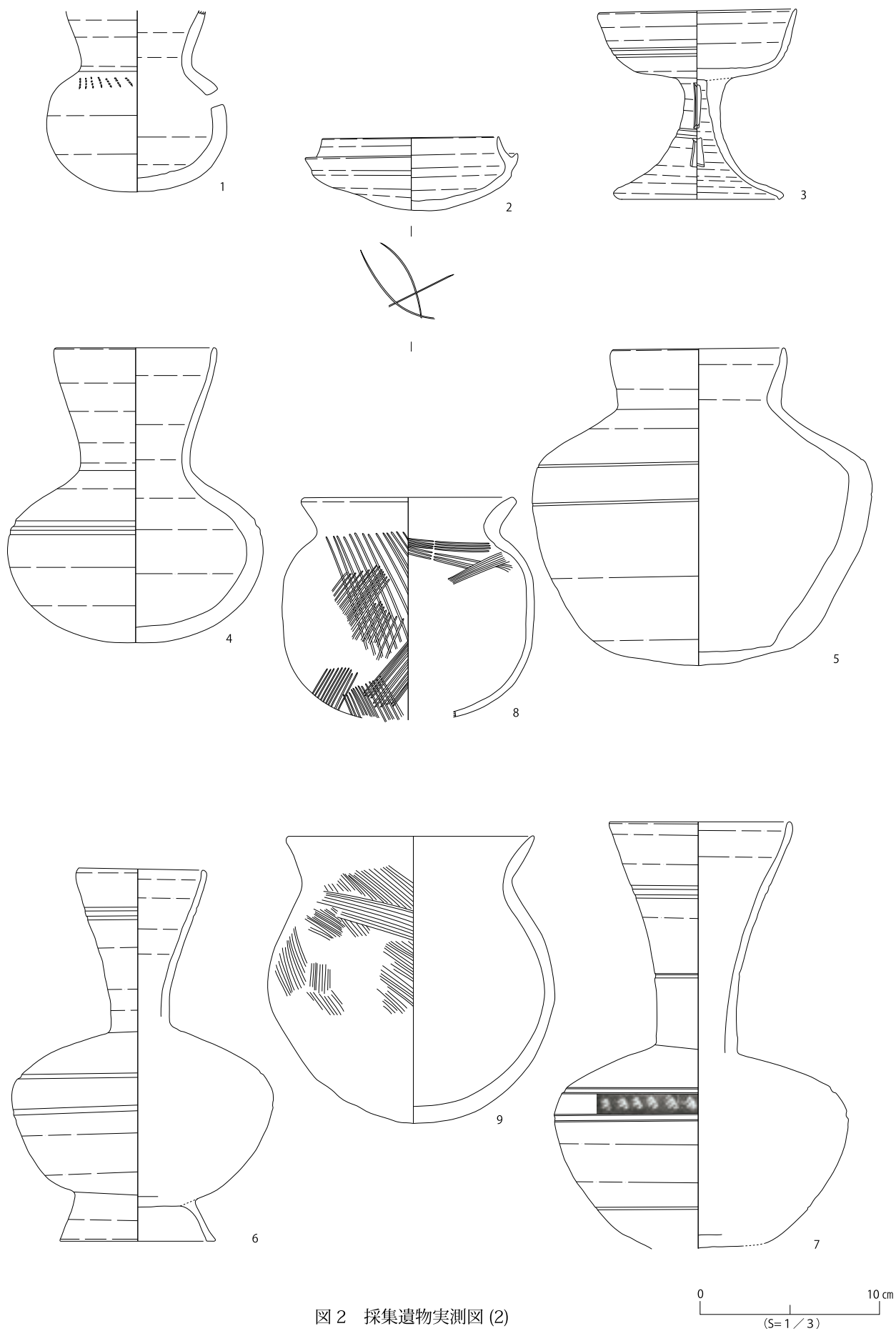
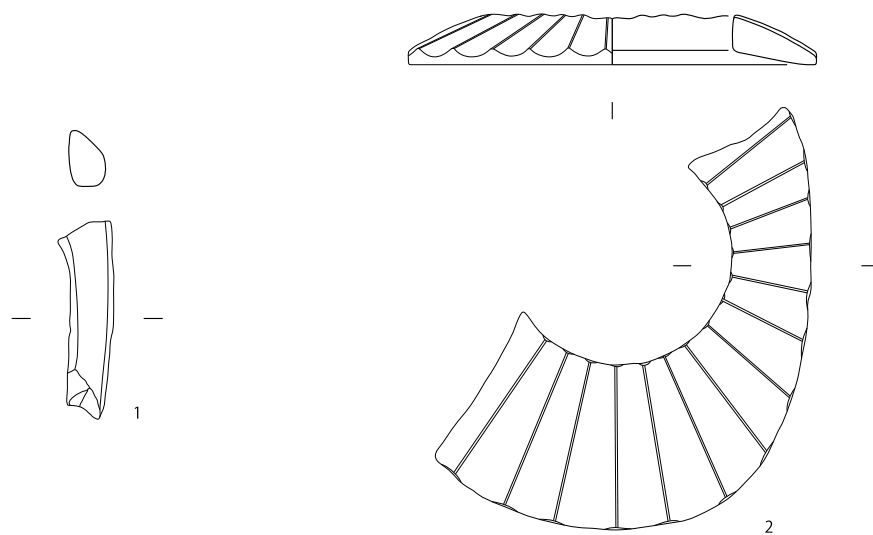


図2 採集遺物実測図(2)

親ヶ谷古墳



鬼塚古墳

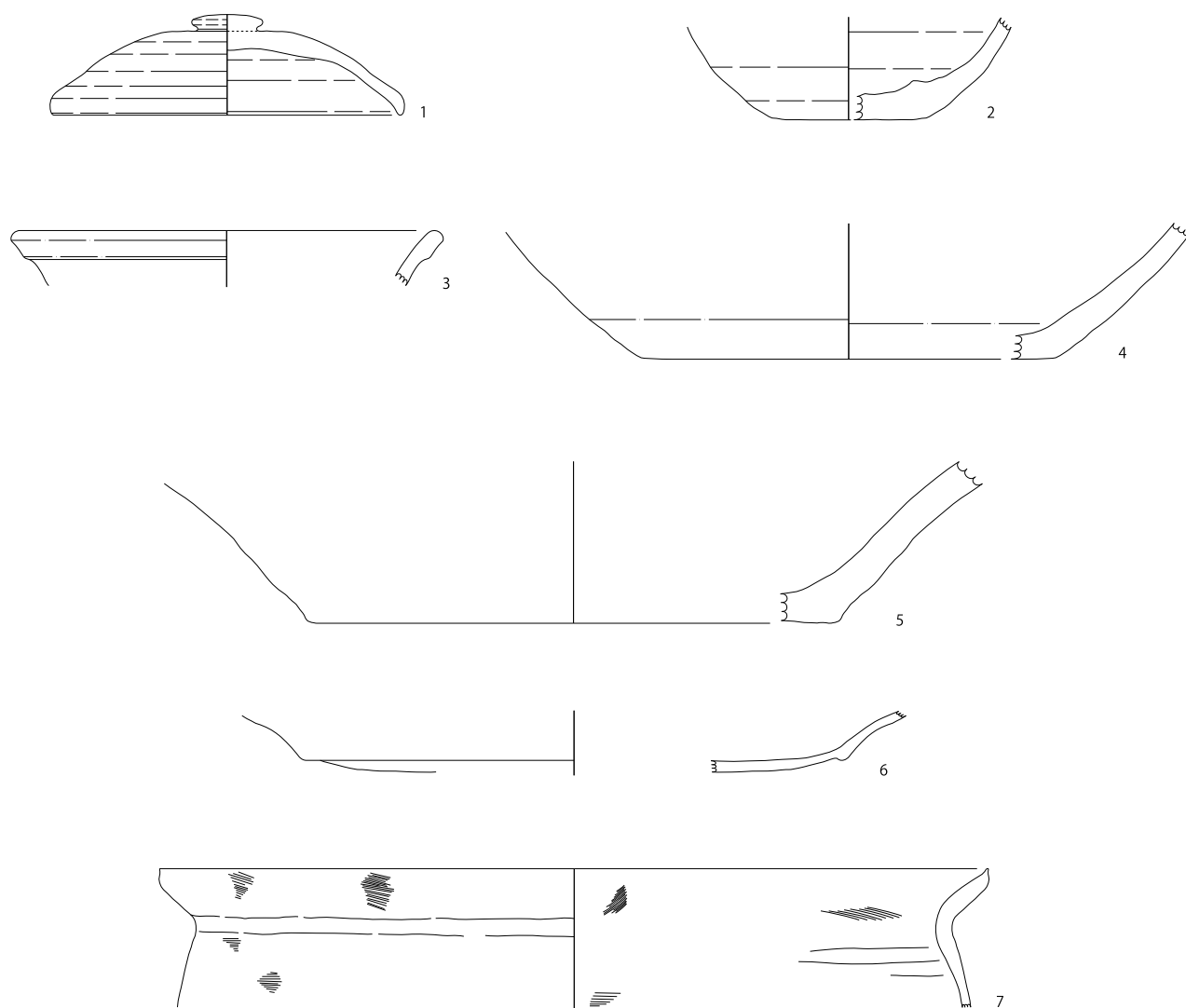
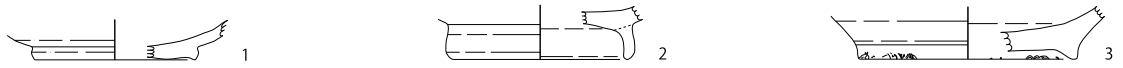


図3 採集遺物実測図(3)

0 10 cm
(S=1/3)
親ヶ谷古墳 1~2 (S=1/2)

中野遺跡



大石若宮遺跡



府中 A 遺跡

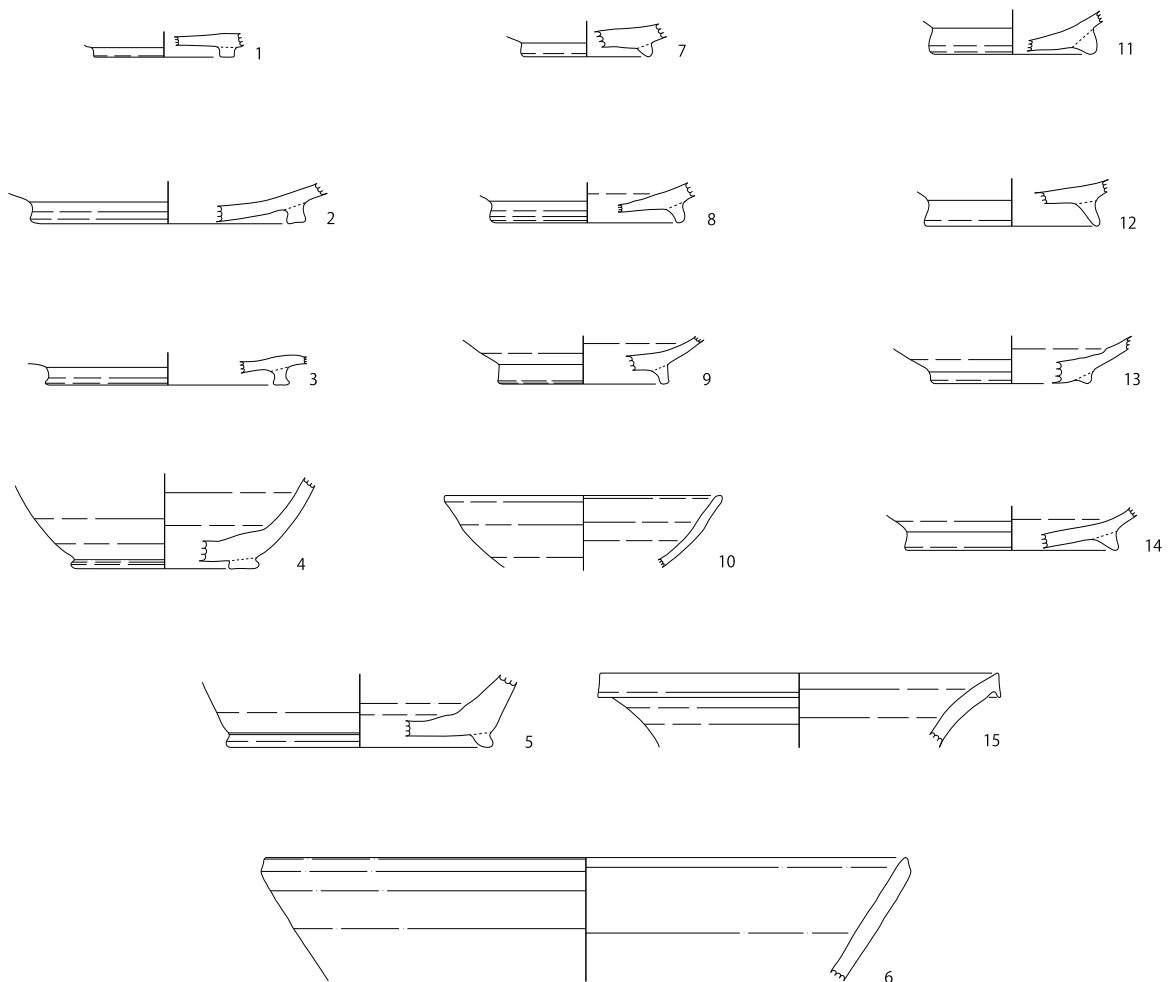
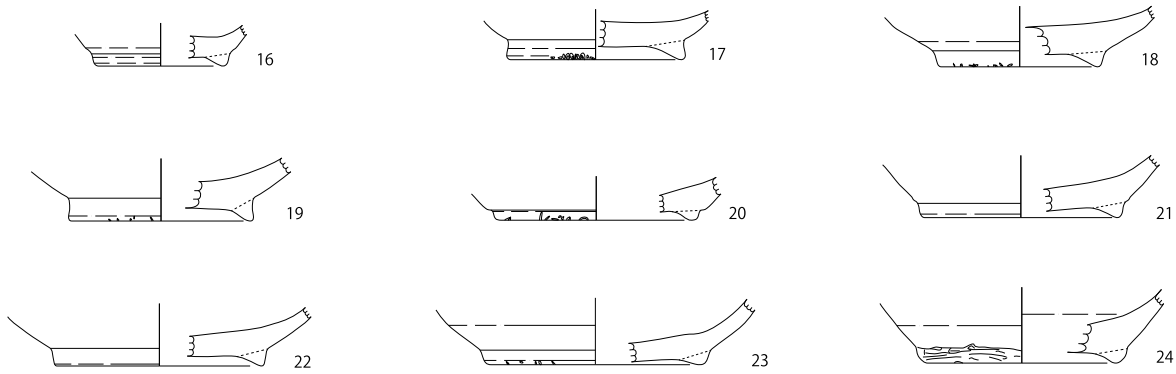


図 4 採集遺物実測図 (4)

0 10 cm
(S=1/3)



府中 B 遺跡

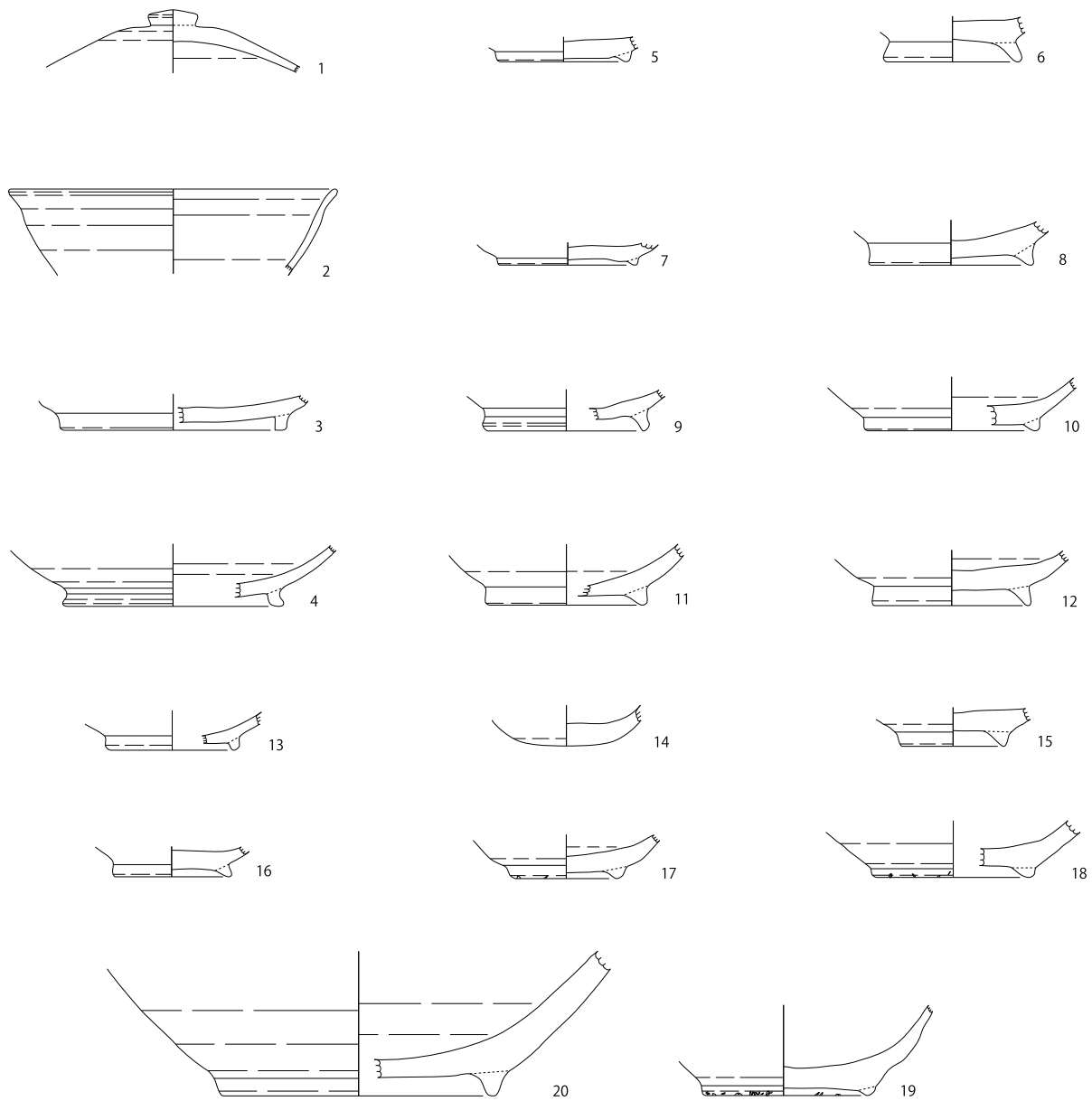
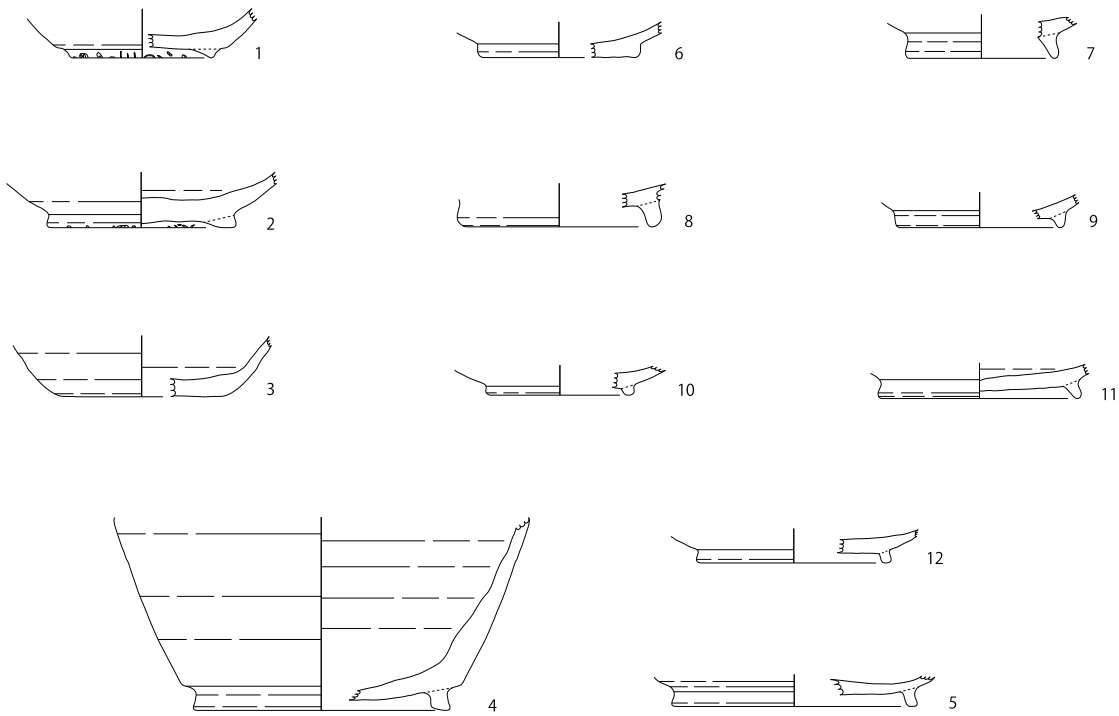


図 5 採集遺物実測図 (5)

0 10 cm
(S=1/3)

葉生笹原遺跡



地藏石田遺跡

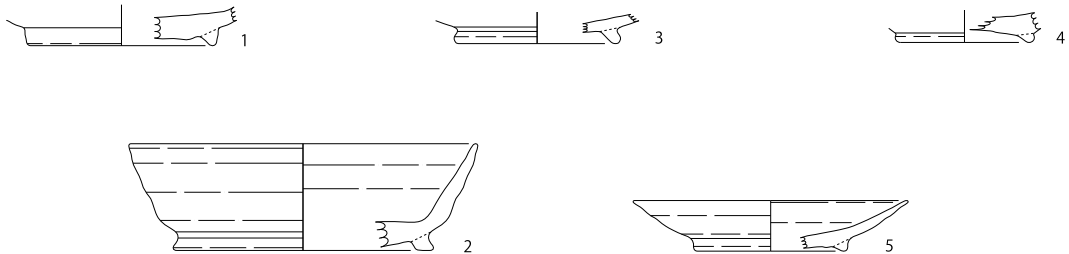
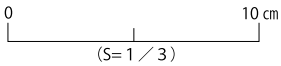
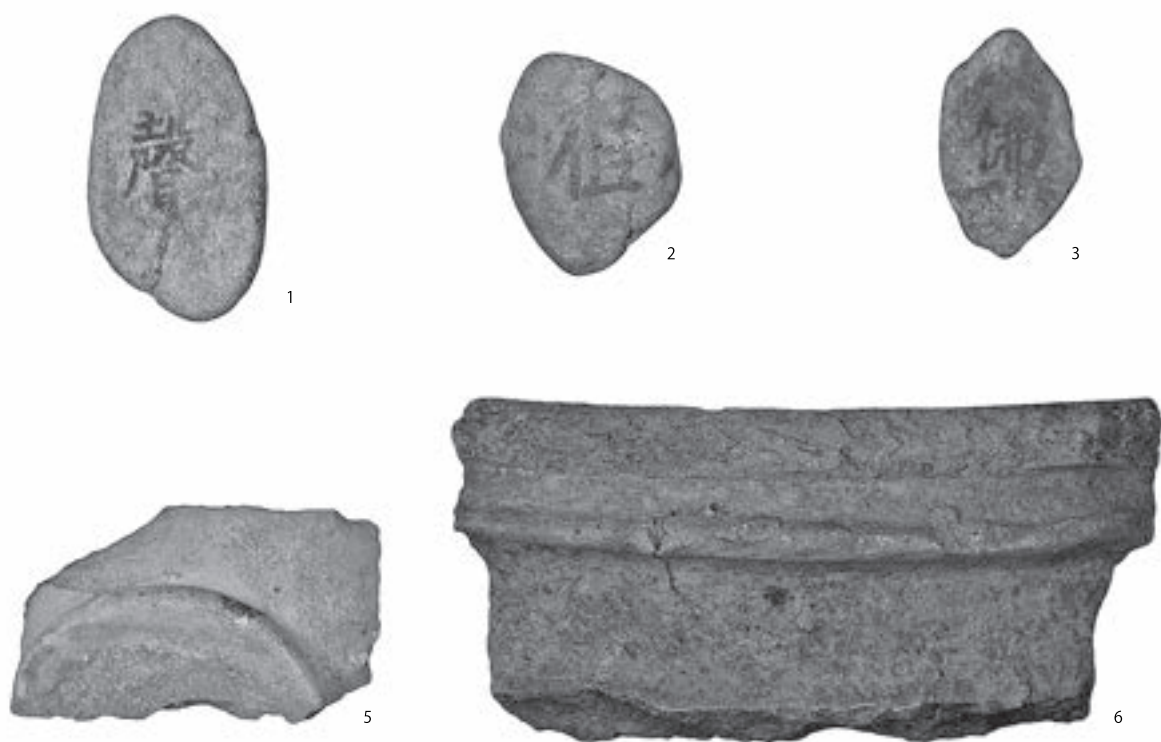
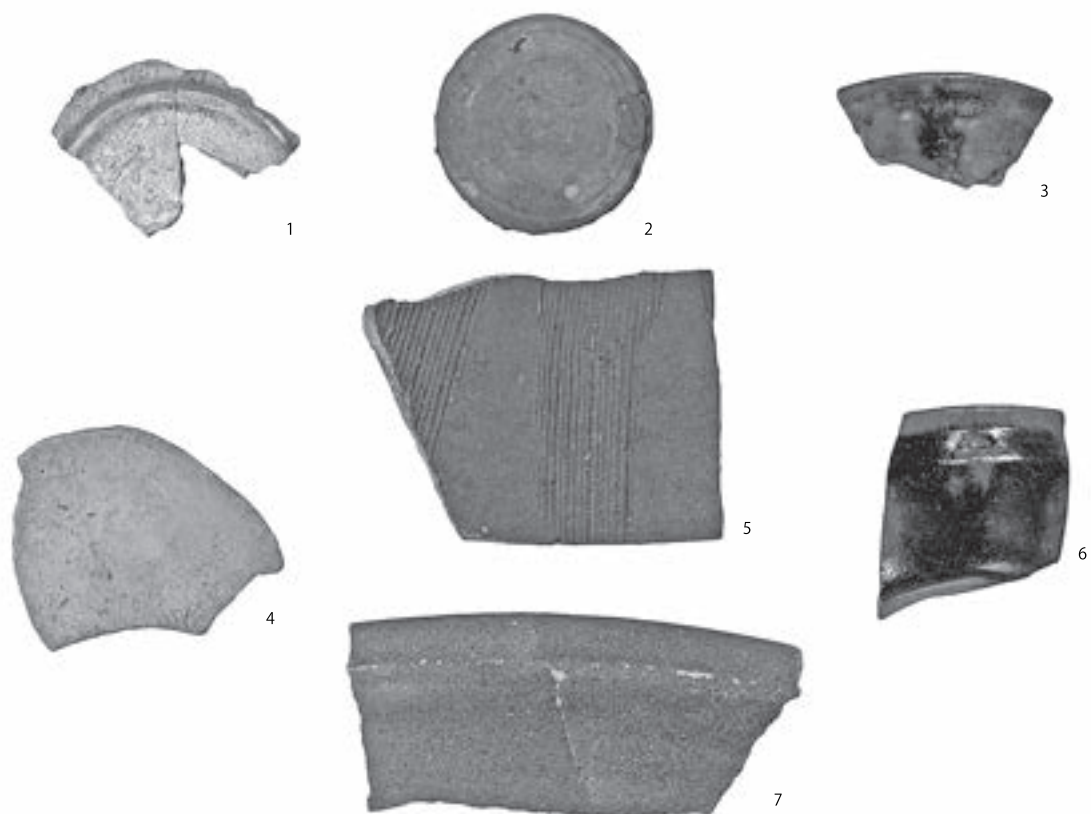


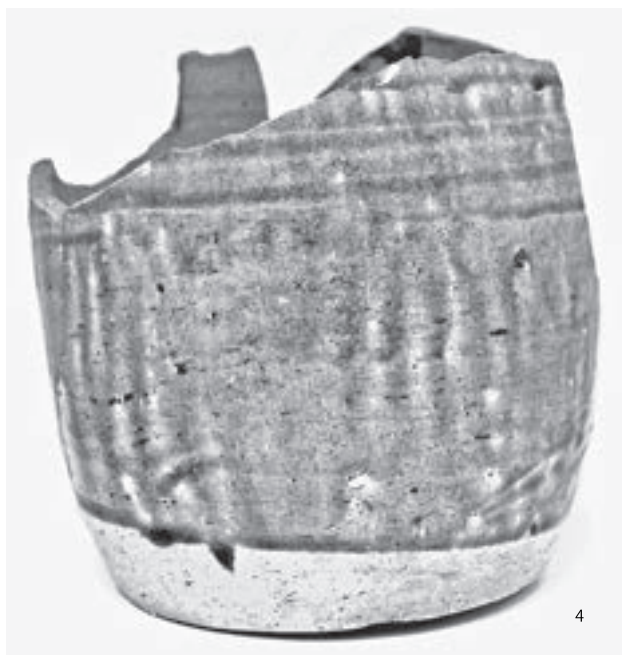
図 6 採集遺物実測図 (6)



(3) 遺物写真



写真図版1 菩提山城跡／伊富岐神社経塚群（1号）



写真図版 2 伊富岐神社経塚群（1号）／南大塚古墳



写真図版 3 南大塚古墳



8



9

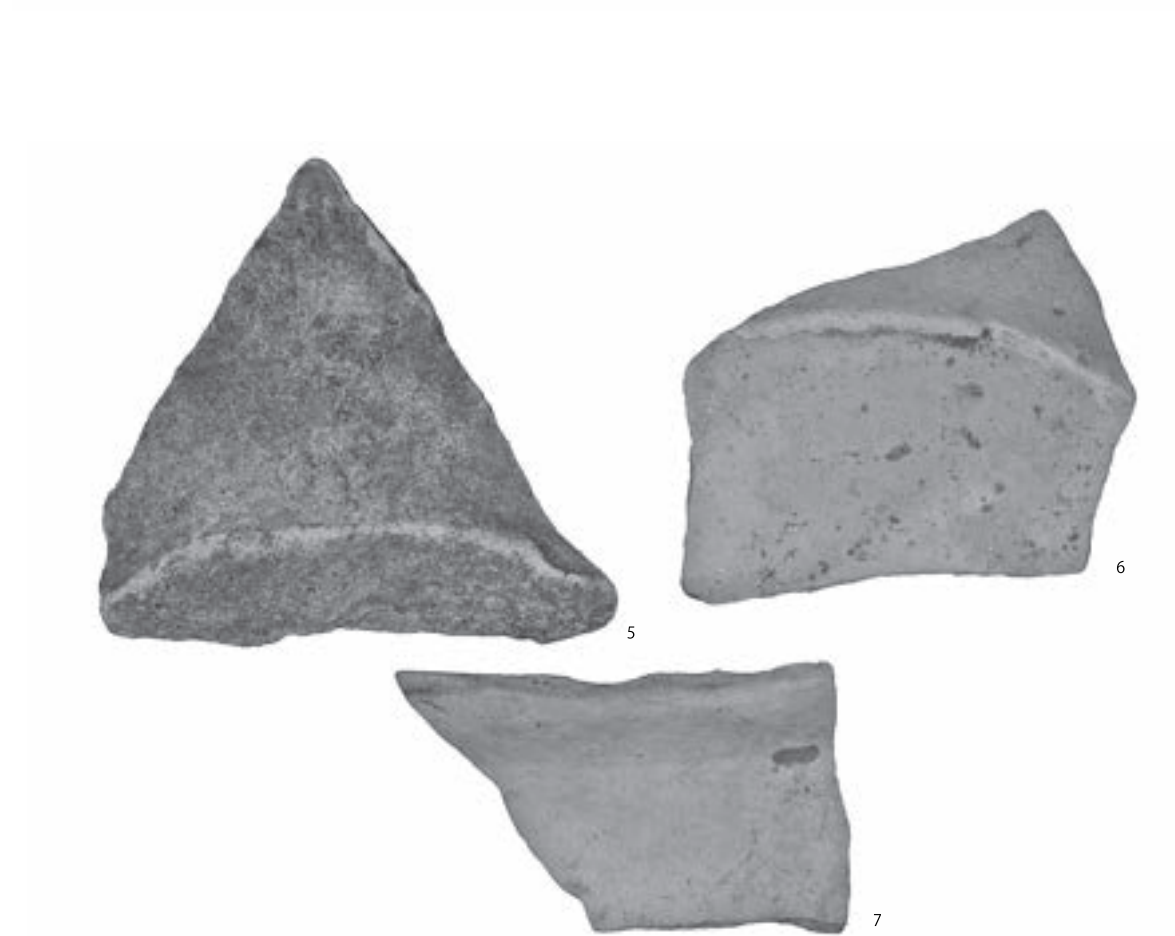


1

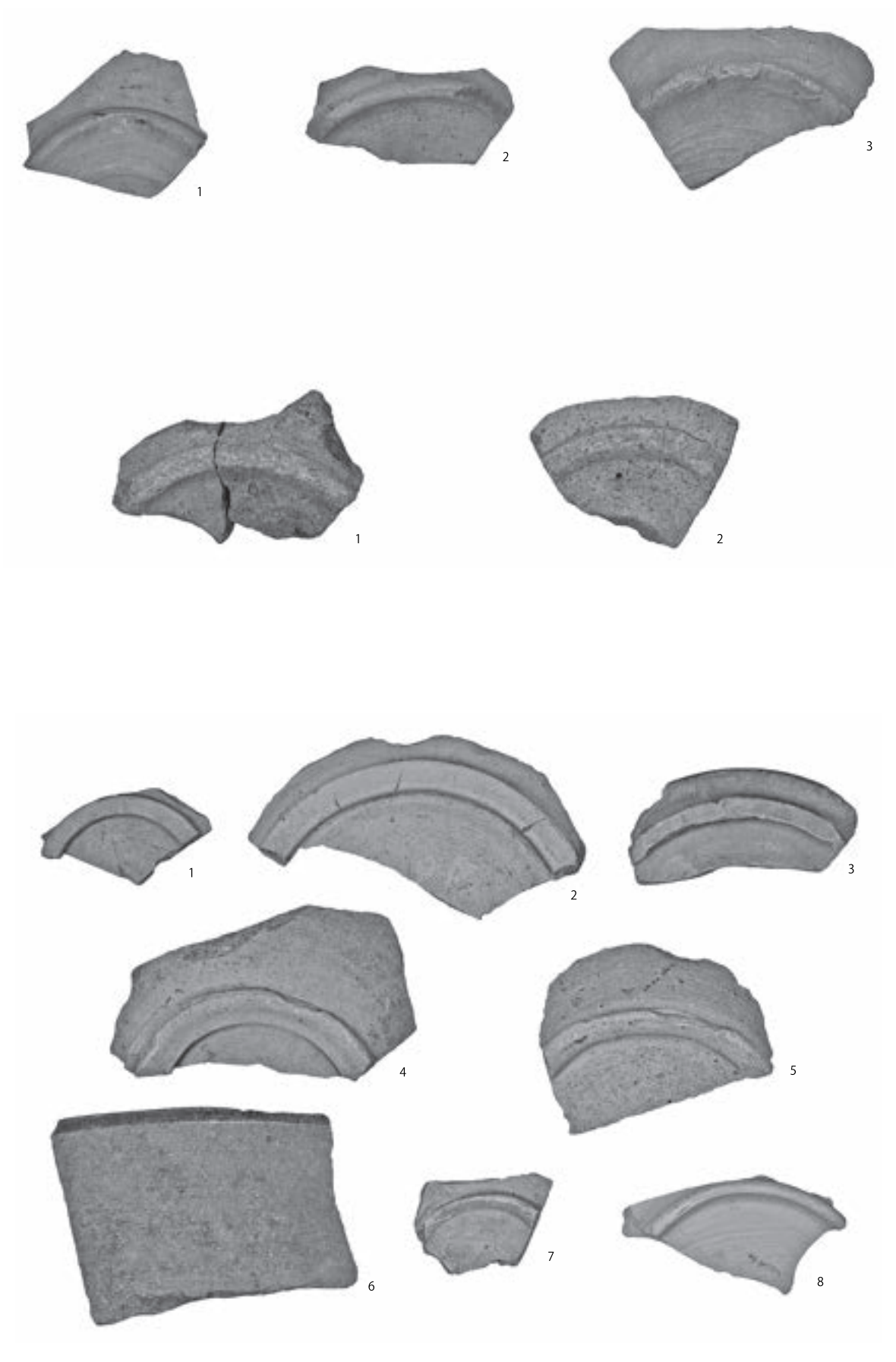


2

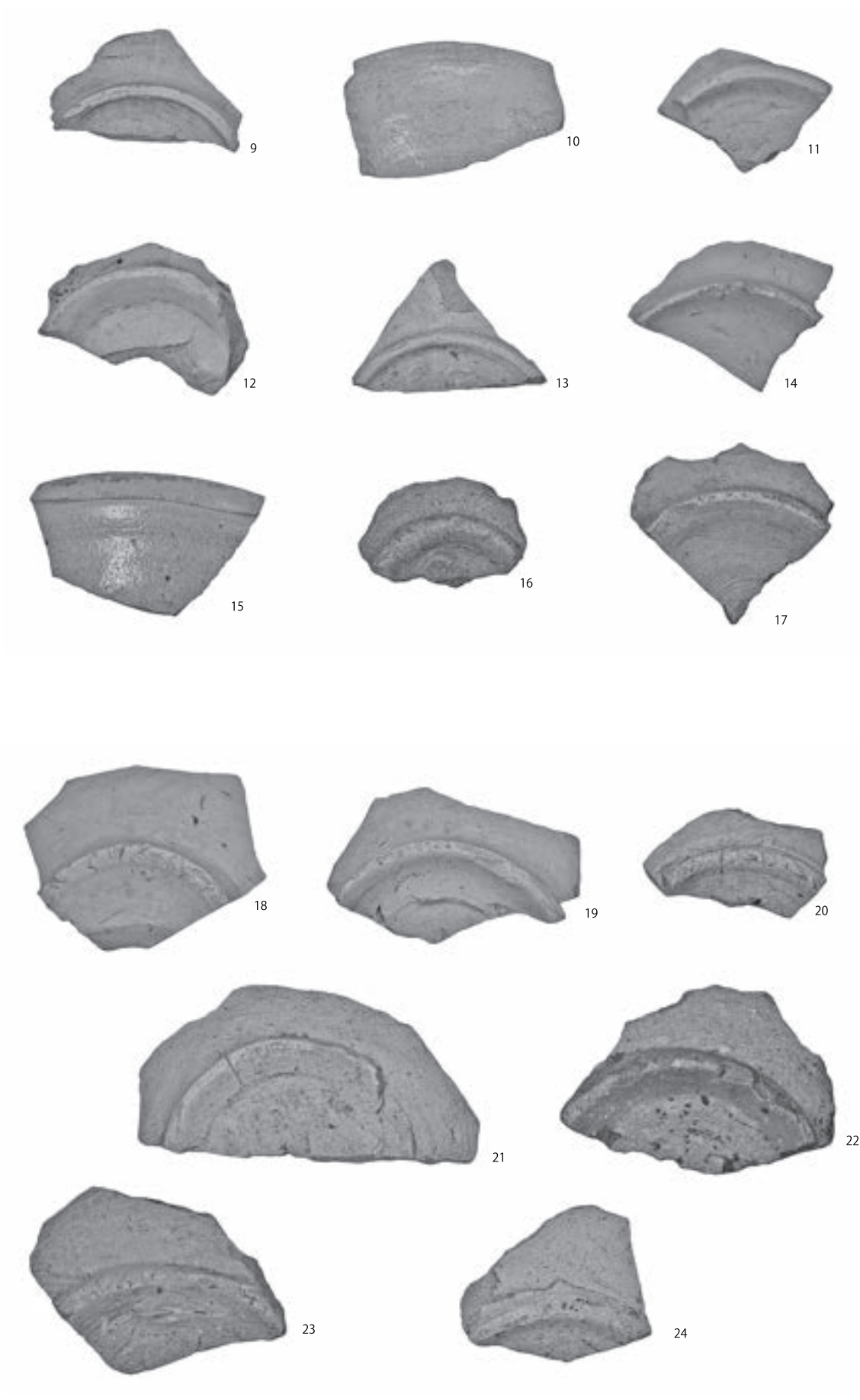
写真図版 4 南大塚古墳／親ヶ谷古墳



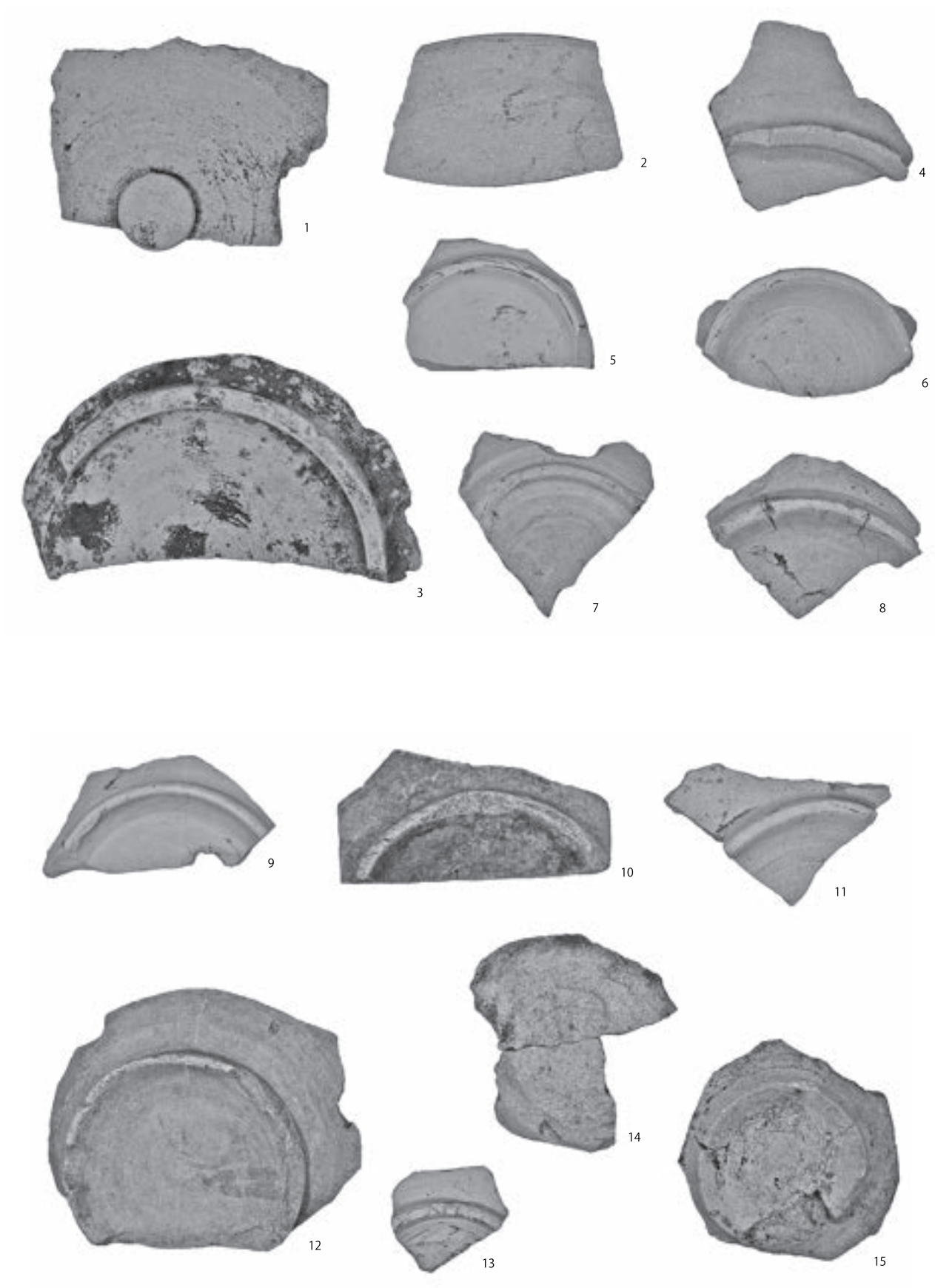
写真図版 5 鬼塚古墳



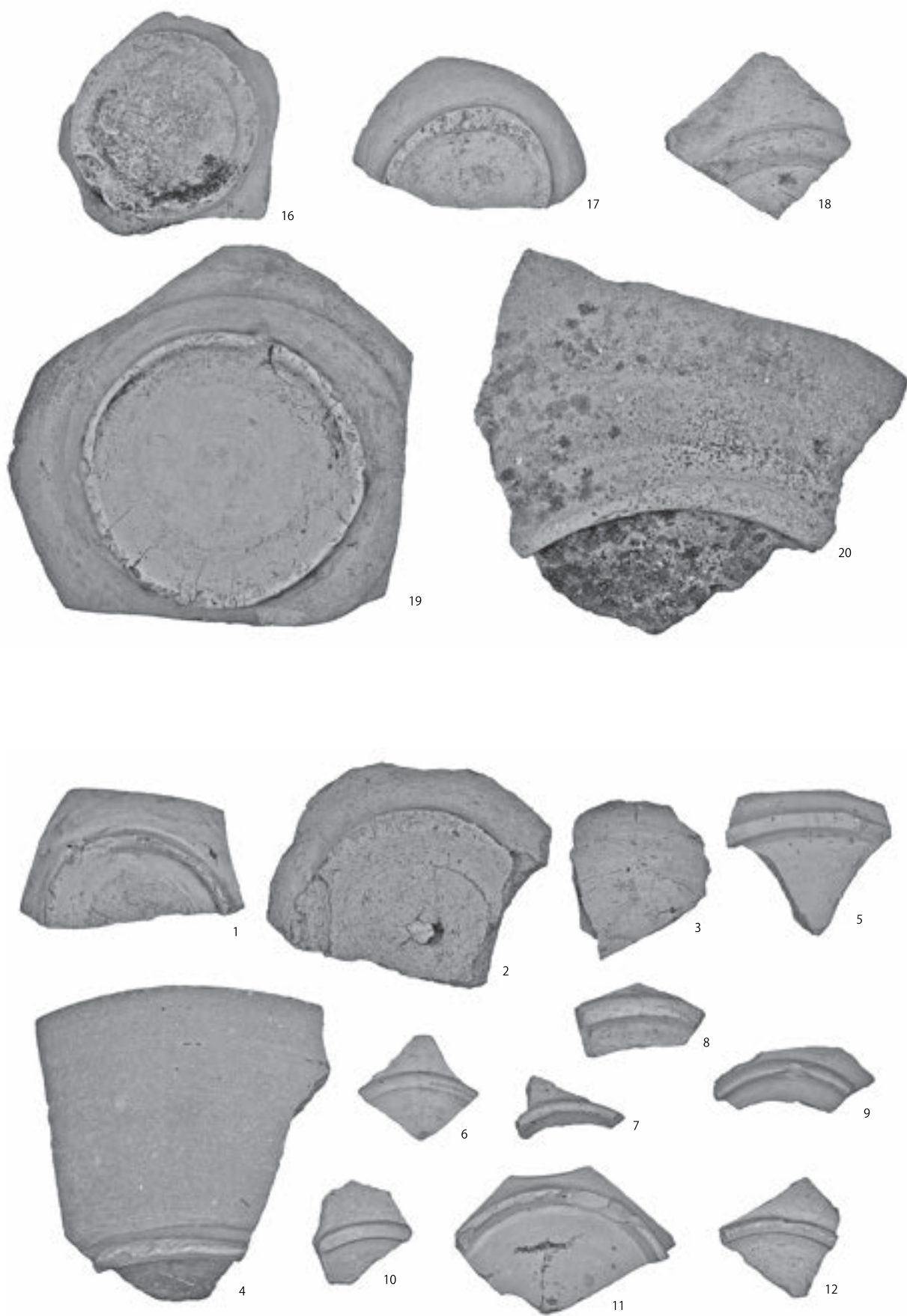
写真図版 6 中野遺跡／大石若宮遺跡／府中A遺跡



写真図版 7 府中A遺跡



写真図版8 府中B遺跡



写真図版 9 府中B遺跡／葉生笹原遺跡



写真図版 10 地藏石田遺跡

